



バージン・アクセス

前橋梨乃

公開版

for Smart Phone

(注)

この小説はインターネットが一般に普及する以前の1991年に書かれたものです。当時、いわば一部の「趣味人」しかやっていなかったパソコン通信が舞台になっているため、現在とは状況が大きく異なる部分もあります。

その点をお含みおきの上、お読みください。

Contents

はじめてのメール

2 通目のメール

3 通目のメール

4 通目のメール

5 通目のメール

6 通目のメール

最後のメール

★タップすれば各章へジャンプします

はじめてのメール

前橋梨乃様

はじめまして。IDナンバー、YTA00416の
松沢仁志といます。

あなたはまだパソコン通信をはじめたばかりだそうですね。いきなりこんな長文の電子メールを受け取って、びっくりしたでしょうね。

じつはこの前、あなたの名前をこのパソコンネットで見つけた時は、ボクもちよつと驚きました。いつも「QUEEN」誌に女装小説を書いているらしいや、あの梨乃さんですよ。

梨乃さんが書き込みしていた「自己紹介」には、「25

歳、OL」とあったから、もしかしたら同姓同名の本物の女性かなとも思ったんですが、「前橋梨乃」なんてわざとらしい名前は、どう考えてもハンドルネーム（あ、パソ通ではペンネームのことを、こう言います）にちがいないし、ここみたいにチェックのきびしくないネットでは、別人に成りすましてアクセスしてくる人って、けっこう多いですしね。で、きっと、あの前橋梨乃さんにちがいないと思ったわけです。

じつは、ボク自身も、別のネットで、よくそういうことしてるもんですから。

それから、文体でも、なんとなくわかるんですよね。

男が女のふりして書くと、やっぱりどっかわざとらしいというか……、「あたし……しちやつたんです」なんて、宇能鴻一郎の小説っぽくなっちゃうんです。

さすがにふだん書いてらっしゃるから、そのへん、うまくごまかしてるけど、同好の人間の目はだませませ

んよ。

女装誌で通ってる名前を安易に使うのは、気をつけ
た方がいいと思います。女装やる人って、意外にコン
ピュータ関係に多いし、パソコン通信やってる人もい
っぱいいるんだから。（ボクは教師ですけどね。）

バージン・アクセスだというのに、なんか、失礼な
ことばかり書いてますね。すみません。あ、それに、
言うまでもないですが、ネット内でこのことを言いふ

らしたりしませんから、ご心配なく。知ってらっしゃると思いますけど、この電子メールもあくまで個人宛です。梨乃さん以外は、読めません。

なんか前置きが長くなってしまいました。今日、メールをさしあげたのは、じつは、ちよっと困ったことになっちゃって、梨乃さんなら相談にのってくれるかな、って思ったからです。

内容が内容だから、フツ―の人には話せないし……。でも、ボクにしてみれば、けっこう真剣に悩んでるんです。

小説のネタにしてもかまいませんから、どうぞ最後まで読んで、アドバイスしてください。

まず、ちゃんと自己紹介しておきますね。さつきもちよつと書きましたが、ボクは23歳の高校教師。東京

の私立S女子高校に勤めています。教科は物理で、就職二年目の今年からは二年生のクラス担任もしています。

まあ、物理なんて科目は、女子高校生の「天敵」みたいなもんですし、授業をしても、まともに聞いている生徒なんて全体の一割もいません。それに、担任しているクラスの生徒からも（嫌われてはいないものの）そんなに人気があるとは言えません。23歳の独身で、

女子校で人気がないなんていうのは、いわば最低の教師ということですよ。

いえ、卑下して言ってるわけではありませんよ。ボク自身にやる気がないんだから、それもしようがないと思っっています。

はっきり言えば、不況下の就職難で、コネだけで入ったデモシカ教師。もしチャンスがあれば転職しようかなんて、本気で考えているんですから。

まあ、大学時代の友人に「女子校の教師をしてる」なんて言ったら、とたんじうらやましがられますが（ボク自身も、たしかに最初はそんな期待感もあつたですが）、それは、現実の女子高校生を知らないからです。

なにしろ、彼女たちの実態ときたら、教室のドアを開けたまま平気で着替えるわ、板書しているボクの後ろでタンポンのキャッチボールをしているわで、純情

な（？）ボクの女性観なんて、こっぴみじんに砕けて
しまいました。

いえ、それも、ボクが男としてカツコよければ別な
んですけどね。背が高くてハンサムな男性教師の前で
は、彼女たちはじつにおしとやかなもんです。これが
同じ人間かと思うほどに。

ところがボクは、157センチ、46キロ。はつきり
言っただけなんです。彼女たちから、時に「カツワイ

「なんてからかわれたりはしますが、要するに馬鹿にされる対象でしかありません。（あ、これにも、今のボクは、強いコンプレックスを持っているわけではありません。むしろ、ボクの趣味にとっては都合いいことなのですから。）

：：というわけで、ボクは、今の仕事に、まったく情熱を感じていません。給料分はちゃんと働こうと思っ
っているだけです。

で、そのぶん、ボクは二つの趣味にのめり込んでいくわけです。もうわかったと思います。ひとつはパソコン通信、そしてもうひとつは、女装です。

パソコンをはじめたのは、自分のパソコンを手に入れた大学三年の時ですが、女装にめざめたのは高校から。高二的文化祭で、たぶんにおふぎけのクラス演劇のヒロイン役をやらされて……という、まあ、ありがちなパターンです。

それまでのボクは、まともな育ち方をしていましたし、チビであることへのコンプレックスも人一倍強く、それだけにふだんから男らしく振る舞おうとしていました。だから、その時は、女装させられることに思いつきり抵抗しました。でも、ホームルームの時間に多数決で決められ（なんでそんなことを多数決するのかいまだによくわかりませんが、高校ではよくあることです）、それ以上いやがつてるのも男らしくないよう

な気がして、しぶしぶ引き受けました。

で、その劇のリハーサルの時です。

メイクされ、白いフリルのいっぱいついたワンピースを着せられ、鏡の前に立って、あぜんとしてしまいました。そこにいたのは、とんでもない美少女だったのです。

寄ってたかってボクにメイクした女の子たちも、「これじゃあ、ギャグにならないわ」と言っていたところ

を見ると、客観的にもかなりのものだったのだと思います。

もちろん照れもあって、ボクはふてくされて見せていましたし、その劇もあんまり真面目にはやりませんでした。

でも、その時から、ボクは女装の魅力のとりこになつてしまったのです。

高校時代も、家族の者が留守の時には、当時大学生

だった姉の下着や服を引っぱり出して、ひそかに楽しんでいましたし、東京の大学に入って一人暮らしするようになってからは、せっせとバイトして、女装用品を揃えました。

それが、そのまま、教師になった今もつづいているというわけです。

もちろんボクは自分がホモだとは思っていませんし、同性と肉体関係を持ちたいなどと思ったこともあ

りません。そういう意味では、女装は、パソコン通信と同じように、純粹に興味だと思つています。だから、ほとんどが、自分の部屋で楽しんでいるだけです。

たまに、ちよつと外出もしますが、それも、あんまり人目に触れない夜、散歩する程度です。

けつきよくボクにとって女装は、自分のコンプレックスを克服するいいきっかけになったようです。男のままだとチビのボクも、女性になればけっこう美人に

なれる。それが嬉しいのです。

——と書いてきて思うのですが、ホントのところ、ボクは今でもやはり強いコンプレックスを持っているのかもしれないね。女装にしてもパソ通にしても、現実のボクを消してしまえる「匿名性」が好きなのですから。

ボクが女装する時、かわいい格好より、むしろ、大人っぽいセクシーな服や、フェミニンな装いが好きな

のも、そんなコンプレックスが微妙に反映しているの
かもしれません。

できるだけ現実の自分から遠い存在になりたいとい
うことなのかも……。

また長くなつてしまいました。ここまでが自己紹介。
ここから、いよいよ本題に入ります。あきれずに読ん
でください。

で、そんなボクが就職して一年を経過した今年の三月。卒業式の日のことです。

式が終わってから、ボクは、三年生のロッカーの点検をしていました。

まだ担任は持っていませんでしたし、物理は二年でやるので、卒業する三年生とはほとんど関わりがありませんでした。だから、引き続き行われた謝恩会には

出席せず、教頭に言われ、その仕事をしていたのです。

生徒たちが、体操服だとか、受験に関係ない教科書だとか、マンガ本だとか、その他もろもろの私物を入れていたロッカーを点検するわけです。

ロッカーは、ほとんどが言われたとおりに片づけられ、鍵を開けた状態で、カラになっていました。でも、中にはやはり、最後まで教師に反抗したかった生徒もいるらしく、鍵をかけたままだったり、昼食のパンの

袋や残った生理用品の類を入れたままのロッカーもありました。そんなロッカーを見つけて、次の三年生のために、鍵を開け、中の物を捨てるというのが、そのときの教育的任務（？）だったわけです。

A組からはじめてH組まで、面白くもないその仕事が終わった頃です。次々にロッカーを開けては閉めていたボクの手が、あるひとつのロッカーで止まりました。

鍵はかかっていなかったので、中に物が残っていたのです。

それは、几帳面なほどきちんと畳まれたセーラー服でした。

紺地のセーラーカラーに水色の線が二本。間違いないわが校の制服です。同じく水色のスカートタイが、やはりきれいに畳まれてのせてありました。

卒業式は制服で行われていましたから、おそらく、

替え用に二着持っていたうちの二着なのでしよう。

そこまでは、ロッカーの中に何かが残っていると、腹を立てていたのですが、それを見た時、ボクは不思議と、なんだかすがすがしいような気分になっていました。

こんなにきれいに畳んで置いてあるということは、このロッカーを使っていた生徒が、意識的に残していったにちがいありません。たぶん彼女は、この学校で

過ごした三年間の思いを、なにかの形で残しておきたくなつたのでしよう。ボクには、彼女がそうしたかつた気持ちがある、なんとなくわかるような気がしました。

しかし、そんなボクの思いとはべつに、ロッカーをカラにしなくてはならないのもたしかでした。そこでボクは、ちよつと困つてしまいました。

このセーラー服を始末する方法は三つあります。

①その生徒に返す。

ロッカーを使っていたのが誰なのかは、調べればすぐにわかりますから、謝恩会の席へ行つて渡せばいいわけです。でも、彼女はたぶん、返してほしいとは思っていないでしょう。

②他のゴミといっしょに捨てる。

しかし、それではなんだか、彼女の気持ちを踏みにじるような気がしました。

③遺失物として、生徒指導室に持って行って置いてお

く。

でも、誰も取りに来ないとわかっている物を、そんなふうにしておくのもムダです。

とりあえず、そのセーラー服をロッカーから出して手に持ったボクは、それを見つめて考え込んでしまいました。単にきちんと畳んであるというだけでなく、スカートとプリーツはわざわざきれいにプレスされているようでした。

で、そんなふうに考えるうち、ボクは第四の解決方法を思いついたのです。

④ボクが持って帰る。

：：断じて言いたいのですが（たぶん信じてもらえないでしょうが）、この時点では、ボクはそれを着てみようなどと思っていたわけではありません。

さつきも書いたように、ボクは女装する時、むしろ大人っぽい服装が趣味なのです。セーラー服に興味な

どありませんでした。

ボクは、なにより、このセーラー服を残していった生徒の気持ちを大事にしたいという、珍しくも教師らしい感情を持ったのです。（でも、それが、どうして、自分が持って帰るといふ結論になるのかを聞かれると、ちよつと困るのですが……。）

とにかく、ロッカーを最後まで点検した後、教員室に戻ったボクは、他の教師に見られないように、その

セーラー服を、そつと鞆の中にしまいました。

で、ここからが問題です。

それを自宅へ持ち帰ったボクは、けつきよく着てしまうのです。（さつき、あれだけそんなつもりはなかったと力説しておいて、なんと無節操なことでしょう。まったく。）

ただ、それにも理由はあるのです。（もう、言い訳

ばっかし。じつは、その数日前、ナチュラルメイクが売り物の高級コスメを一式、大枚はたいて買ったばかりだったのです。

その化粧品は「つけててもきれいな素肌みたい」というのがうたい文句でした。で、それを試してみたいと思っていたところだったのです。それには、高校生になってみるのはいい方法でしょ。その化粧品でメイクして、そのセーラー服を着て、自然に見えれば大成

功というわけです。

その夜、いつものようにレンジ食品をわびしく食べてから、いつものように入浴したボクは、いつものように基礎化粧品をし、その後、その新しいコスメでメイクしました。

確かにそのコスメのうたい文句はウソではなくて、鏡台の中のボクの顔は、かなり近くで見ても素肌に見えました。ファンデーションはきれいにのびて、みず

みずしく透明感のある肌をつくっていましたし、無香料で、化粧臭さもありませんでした。口紅も淡いローズピンクでのびがよく、せいぜいリップクリームをつけている程度の健康的な若い女の唇に見えました。

もちろん、ふだんからお肌の手入れを怠らず、ヒゲも手間をかけて抜いているボクの実力の成果でもあります。

で、うれしくなったボクは、ふだんはあまりつけな

白いブラと白いショーツ、白いスリッパに身を包み、ストレートロングのウイッグをかぶって、そのセーラー服を着ました。

プリーツスカートをはき、ホックをとめ、ファスナーをあげる。ちよつと体をひねればスリッパが見えそう。な短いう上着をかぶり、衿のスナップをとめる。セーラーカラーの下に絹のスカーフを入れ込み、前でリボン結びする。素足に白いソックスをはく。

そこで鏡を見て、ボクは思わず、声を上げてしまいました。

「かわいー！」

そこには、あの高校の文化祭の時より、もつとずつとかわいい美少女がいたのです。

たぶんそれは、さつきも書いたように、お肌の手入れに余念なかったことと、けっこう長い女装歴（高校の時から数えれば七年！）で、女らしい身のこなしや

表情が身についていたこともあると思います。

とにかく、そこにいるのは、どう見ても女子高校生、それも、ふだんボクが見ている実際の女子高生より、数段キュートな女の子でした。

「やっぱり、あたしって、こういうの似合うんだ」
ボクは、軽く握った手をあごに添え、肩をすくめるようなポーズでそう言ってみました。

基本的に童顔のくせに、ふだん、ボディコンやロン

グドレスを好んで着ていたボクは、やっぱり背伸び（？）のしすぎだったのかもしれない。

「ちよつと、乙女チック路線に、軌道修正してみようかしら……」

——というわけで、その日からしばらく、ボクは、そのセーラー服で楽しんでしまいました。

それでやめておけばよかったのです。

でも、セーラー服を着たボクが、あんまりかわいらしすぎたんです（また、なんという言い訳）。

ボクは、この女の子が世の中でも女子高校生として通用するかどうか試してみたくまりました。これを着て外出してみたくてしかたなくなつたのです。

でも、それはとても危険なことでした。

セーラー服で、いつものように夜中に出歩いていたら、かえって目立ってしまいます。警官に出会えば、

職務質問は免れません。

仮にもボクは教育者。女装外出して警察沙汰となれば、問題がありすぎます。ましてや、その制服はわが校のものなのです。高校教師が、自分の学校の生徒のセーラー服を盗んで着ていた（盗んだつもりはありませんが、第三者からはそう見えるでしょう）となれば、もう変態教師以外の何者でもありません。解雇されるだけならまだしも、好奇のマスコミの餌食にされない

とも限らないのです。そうなったら再起不能です。とても夜の外出は無理でした。

で、ボクは毎日、壁に掛かったそのセーラー服を見て、悶々としていたというわけです。

で、問題の、四月中旬のある日。

その日は水曜日だったので、ボクの勤める学校は、創立記念日（たぶん、開校の時、建築が遅れて、

四月始めの予定がずれ込んだのでしよう）で、毎年、特別休日になる日でした。つまり、世の中一般は通常に動いていて、ボクの学校だけが休みという日です。

その日、ボクは誘惑に負け、つい、セーラー服で外出してしまいました。（「つい……」なんて、都合のいい表現をしています。じつは二日前に女子学生用の黒い革靴を買っていたのですから、心の底では、やるならこの日しかないと思っていたのです。）

さすがに学生靴はなかったもので、スポーツバッグを持ち、女子高校生が歩いていても怪しまれない時間、つまり朝早く、マンションを出ました。

セーラー服に白いソックス。例のファンデーションと口紅をつけ、前髪だけは自毛を内巻きにして額にかけ、ストレートロング（のウィッグ）の両サイドをまとめ、バックの髪の上でゴムどめするという、考え抜いたリアルな女子高生スタイルです。

でも、内心は（なにしろそんな明るい時間に歩いたことなどありませんでしたから）、ビクビクものです。

マンションのある町（都内ですが23区ではありません）の商店街を、さも駅に急ぐように歩いている時、ボクの心臓は、どきんどきんと大きな音を刻んでいました。

でも、道行くサラリーマンや朝の早い八百屋のおじさんなど、出会う人の中に、べつに不振そうな視線を

向ける人はいませんでした。いえ、時々こちらを見る人はいましたが、「ん？ 変なヤツ」という視線と、「お！ かわいいコ」というのの区別くらいは、いくら舞い上がっているボクにだってつきまします。それらの視線は明らかに後者でした。

駅に着く頃には、ボクはすっかりいい気分になって、いよいよかわいらしい仕草で、セーラー服の細くすぼまった袖口の、内側につけた女物の腕時計を見るポ-

ズをとったりしていました。

家を出る時には、そこまで帰るつもりでした。でもボクは、それではなんだかもったいないような気がしてきました。で、つい（また、だ）、切符を買い、電車に乗ってしまったのです。

じつは、ボクは毎朝、通勤にこの電車を使っています。だから、それが、乗車率300%以上のとんでもない満員電車だということは知っていました。でも、

慣れた路線だから大丈夫だろうと思ったのです。ところが、背広姿で乗るのとセーラー服で乗るのでは、そこは、まるでちがう世界でした。

超過密の車内で、プリーツスカートが他の乗客の鞆に引っ張られるわ、揺れるたびに、摩擦で上着がまくれあがるわ、髪の毛が人の洋服に引っかかるわで、ずっと全身に気を使っていなければならぬのです。

その上……。

最初、ボクは、その手を、身動きとれずに偶然そこにあるのだと思っていました。しかしそれが、ボクのおしりのあたりでもぞもぞと動き始めた時には、本当にびっくりしました。

「……あっ」

痴漢にあうなんて（もちろん）初めての経験です。

その手は、スカートの上から、ボクのおしりをゆっくりとなでていました。

ボクはなぜかどきどきし、体全体を固くしました。と余計に、おしりを這いまわる手の感触が、敏感に伝わってきます。

ショーツの中で、ボクのがうずいていました。

ボクは、そのことにもちよつと驚きました。男におしりをなでられて感じてしまうなんて、夢にも思っていなかったからです。

ボクは、まわりからの圧力にあらがって少しだけ体

の向きを変え、首をひねって、後ろを見ました。

そこにいたのは、ボクと同じ年くらいの若いサラリーマンでした。ボクより頭ひとつ分背の高い、でも気の弱そうな顔をした男です。

ボクと目が合うと、男はあわてて目をそらし、同時に、おしりの手も離れていきました。

ボクはほっとしましたが、男にさわられたあたりが、まだなんだかもぞもぞとしていました。

次の駅で、ボクはあわてて電車を降りました。ホームを歩いている時も、まださっきの「どきどき」の余韻がつづいていました。ショーツで押さえられ股の間に挟まれたものも、まだ正常な状態には戻っていません。

△今、痴漢されたんだ……。▽

そう思うたびに、それがまた大きくなって、歩きにくいほどでした。

その駅はターミナル駅でした。

ボクはコンコースへの階段を下りながら、このまま帰ろうと思いました。反対方向へ向かう電車なら、さっきのようには混んでないはずですから、もうあんな目にあうこともないでしょう。

でも、階段を下りきった時、また、このまま帰るのはなんだかつまらないような気がしてきたのです。もしかするとそれは、体に残るさっきの余韻のせいだっ

たかもしれません。

で、ボクは、つい（また！）、自宅方面へ向かう隣のホームではなく、もうひとつ向こうの、都心方面に向かうホームの階段を上がっていました。

そして、次の電車（これも相当なラッシュでした）でも、やっぱりボクは痴漢にいました。

今度の方は、ボクのすぐ前に体を密着させて立った、30代後半の、派手なジャケットを着た男でした。

雑誌を持った男の手が、そのみぞおちのあたり（つまり、ボクの胸のあたり）にありました。男は、その手の甲を、セーラー服のボクのバストに、必要以上に押しつけてくるのです。それが、単に人に押されてそうなっているのではないことは、男が手首を動かして、ボクのバストを持ち上げたりしてくることでわかりました。

もちろん、そのバストの中身は、ブラジャーのカッ

プに包まれたシリコンゴムのパッドです。そういう意味では、さつきおしりをさわられたのと同じがい、けっしてボクの「生身」を刺激されているのではないのです。にも関わらず、不思議なことに、ボクは、さつきよりもっとどぎまぎしていました。

男に、セーラー服の胸を触られている……。

△：：恥ずかしい▽

自分でも不思議なのですが、心の中にそんな気持ち

が湧いてきて、ボクは身を固くし、うつむいてしまいました。頬が上気して赤くなっているのが、自分でもわかりました。

ボクのそんな様子を見て、男はさらにその手を強く押しつけ、揉むように動かし始めました。

ボクは居ても立ってもいられなくなり、早く駅に着かないかな、と思いました。

で、次の駅で逃げるように降りたボクは、けつきよ

くまた、さつきと同じような気持ちになるのです。

そのまま帰る気はせず、すぐまた次に来た満員電車に乗ってしまいました。

その後、ボクは、ラッシュ時間が終わる九時近くまで、次々に電車を乗り継ぎ、都内をぐるぐるまわっていました。(バカですな、まったく。)

そして、乗った電車乗った電車で、たいてい痴漢さんにあいました。(なんで急に「さん」づけなんでし

よう？)

首筋にわざとらしく息を吹きかけてくる人、腰のあたりで自分のものを押しつけてくる人、やり方はいろいろでしたが、ボクは、世の中にこんなに痴漢さんがいることに、ちよつと驚いてしまいました。(カマトト！)

どうやら、セーラー服を着たボクは、単に女子高校生で通るといっただけでなく、そばに寄ってきた男がど

うしてもちよつかいを出してみたくなるほど、カワユイみたいなのです。痴漢さんはこわかったけど（うそつき！）、ボクは、そのことに、わくわくするような気持ちを感じました。

そんなこんなで（どんななんだ？）、けつきよく、その朝ボクは、つぎつぎに痴漢さんにあうのを、楽しんでしまったというわけです。

ひとつ面白かったのは、一人目と二人目のちがいが

そうだったように、痴漢さんたちは、ボクが恥ずかしそうにすればするほど大胆になるということ。

途中からそのことに気がついたボクは、痴漢さんの前で、わざと恥ずかしそうにもじもじして見せました。うつむいて、本当に困ったという顔で、ちよつと体を震わせたりすると、痴漢さんたちは余計に興奮するよ
うなのです。

でも、そんなことをしていたせいで、ボクはとんで

もない目（つうか、なんつうか……）に遭うのです。

……というところで、もう、このネットの電子メールの字数制限ぎりぎりです。このつづきは、また次のメールで書きます。

近いうちに送信しますから、懲りずに読んでくださ
いね。

2 通目のメール

前橋梨乃様

先日電子メールを送った、
IDナンバー YTA00
416の松沢仁志です。

さっそくRes（もう知ってらっしやるかもしれませんが、パソコン通信では、返信のことをこう言いませ。）をいただき、ありがとうございます。

やっぱり「QUEEN」の女装小説の梨乃さんなんです。安心してました。

じつは前のメールを送ってから、もし梨乃さんがあの梨乃さんでなく、このネットでそう振る舞ってらっしやるように、本物の女性だったらどうしようかと、

内心、はらはらしていたんですよ。ずいぶん恥ずかしいこと、いろいろ書いちゃいましたから。特に後半は、ワルノリしちゃって……。

根がお調子者だもんですから、ついついあれこれ書きすぎてしまつて。

その結果、「相談したい」とか言いながら、話が途中で終わってしまいました。肝心の、ボクが困っている内容については、まだなにも触れていませんね。こ

の前のつづき書きますから、読んでください。

えっと……、この前は、セーラー服で外出したボクが、満員電車で、次々に痴漢にあった話まででしたね。そこから始めます。

この前も書いたように、痴漢さんにあったボクは、だんだんそれが面白くなってきて、もじもじする演技

なんかして、大胆にも痴漢さんを挑発しちゃったりしたわけですよ。

で、もう8時45分をまわって、そろそろラッシュユアワーが終わろうという頃。ボクは外まわりの山手線に乗っていました。

電車が目黒を過ぎた時です。ボクのお腹のあたりにずっと手らしきものが伸びてくるのを感じました。

△あ、きた。▽

もう痴漢さんに慣れた（！）ボクには、すぐわかりました。

ボクはその時、ちょうど車両の真ん中あたりに乗っていましたが、まわりはぐるっと人に囲まれています。ボクが体を接している人だけでも10人くらいはいたでしょう。その10人から押されているわけですから、誰の手か確かめることも簡単ではありません。

ボクの前にいるのは四人。左側から、学生服の男の

子、OLふうの女性、50代の管理職ふう、30代の商社マンふう。このうちの誰か（まあ、OLは除いてもいいけど）の手であることはたぶんまちがいはないでしょう。

と、その手がじりじりと下がってきました。

その動きから考えて、手は右前から来ているようです。おそらく、ボクと斜に体を接している50代か30代の、どちらかのサラリーマンのものでしょう。

これは、この朝六人目（！）の痴漢さんでした。でも、直接前を狙われたのは初めてです。それまでは、たいてい、おしりか胸にタッチされていたのです。いくら痴漢さんに慣れたといっても、ボクはこれまで以上に緊張しました。

やがてプリーツスカートの上を降りてきたその手は、ボクの下腹部から、その部分に迫ってきました。

ボクは、体をびくつと震わせました。痴漢さんを挑

発するつもりもあつたのですが、むしろ無意識にそう
なつてしまったという方が正確かもしれませぬ。

その手は、スカートのプリーツの折り目の間に指先
をつっこむようにして、ボクの両腿の合わせ目をさぐ
ってきました。

じつは、ボクのはサポート力の強いショーツで
押さえて、股の間に挟んでいましたから、ここまです
らまだ気付かれないでしょう。でも、手がもう少し入

ってきたら、ひとたまりもありません。

ボクは、両腿の間でむくむくと頭をもたげはじめたそれがわからないように、必死に力を入れ腿を閉じようとしていました。だから、余計にもじもじしているように見えたかもしれませぬ。

50代の方の男がちらりとこちらに視線を走らせました。ボクは思わず（かどうかあやしいものですが）、目を伏せました。

と、手が、ボクのその反応を楽しむように、さつきより強い力で股の間に進入して来ようと思いました。

どうやら痴漢さんは、上等な背広を着た、インテリっぽい50代の方にまちがないようです。

その時、電車が恵比寿の駅に着きました。と同時に、手がさつとボクから離れました。

ドアが開き、降りる人と乗る人の動きがあり、過密状態がいったん少しだけバラけ、また密着しました。

ボクの前にいたOLと30代のサラリーマンも、離れていきました。

ところが、例の50代の方は、さらにボクにくつついてきました。で、電車が動き出すと同時に、また、しつこく狙ってきたのです。

それだけ、ボクに魅力があるということ（ほんとに、もう！）でしようが、でも、今度は、そんなことを言ってもらえなくなってきました。

男の手が、下から狙ってきたのです。

気がつくのと、その手は、ボクの右の腿のあたりにありました。そして、そのあたりを少しまさぐった後、スカートをたくし上げはじめたのです。

ひざ丈のプリーツスカートはスリッパといっしょに、あつと言う間にたくし上げられ、汗ばんだ男の掌の感触が、ボクの素肌の腿に伝わりました。

上目遣いにかがうと、男は、なに食わぬ顔で車内

吊りの広告を見ていました。でも、その視野の端で、困惑するボク表情をとらえているにちがいはありません。その証拠に、スカートの中に差し入れられた男の手は、楽しむようにボクの腿をなで、その後、力ずくで両腿の間に割って入ってきました。

こうなっては、ボクも、もう演技どころではありません。ボクはその手を振りきろうと、下半身を揺すり、同時に、必死の力で股を閉じました。その手がそこか

ら上ってきて腿の合わせ目まで達すれば、いくらなんでも正体はばれてしまいます。

今度こそ、ボクは困り果て、こんな馬鹿な遊びをはじめたことを後悔していました。

と、ボクがついに男の力に負けそうになった瞬間です。

「おじさん、いい歳して馬鹿なことやめろよ」

たぶんボクとその男にしか聞こえないくらいの低い

声で、しかし、明瞭な言い方で、そんな言葉が聞こえました。

うつむいていたボクが顔を上げるのと、男が自分の目の前にいる人物をにらむのと、ほぼ同時でした。

言ったのは、先刻からボクの左前にいた学生服の男の子でした。三人のうちでいちばん身長が高く、背の低いボクのちょうど目のあたりに、その子の第二ボタンがありました。ボクは、ちらつとその子の顔を見上

げましたが、またすぐにうつむいてしまいました。

恥ずかしかったからです。

ボクは痴漢されているところを、その子に目撃されていたのです。いや、そんな満員状態で、「行為」そのものは見えなかったでしょうから、ボクは表情でその子は気づいたのでしよう。ボクは本心から（これは本当です）恥ずかしくて、顔を赤らめました。

それに、男の手は、まだボクの腿の間にあります。

人からは見えないにしても、ボクのスカートは、いまだ、まくられたままの状態なのです。

「……もつと大きな声で言おうか。このスケベ親父」
男の子は、また押し殺した声で言いました。

それと同時に、男の手が、ボクの下半身から離れま
した。

電車を降りる人の流れに押し出され、ボクは渋谷の

ホームに立っていました。

うつむいたままだったのでよくわかりませんでした
が、あの痴漢さんも、そして、学生服の男の子も、こ
こで降りたようでした。

ほんの少しの間、ボクはぼーっとしていましたが、
すぐそのことに気づき、あわてて、階段に向かう人波
に目を走らせました。

と、7・8メートル先に、学生服の後ろ姿が見えま

した。ボクは、思わずその後を追っていました。痴漢
されているところを助けてもらったんだし、このまま
お礼も言わないのは、ちよつといけないような気がし
たのです。

男の子は、学生鞆を肩に背負うように持って、他の
人とはちがって、あまり急いでいるふうもなく、ぶら
ぶらと歩いていました。だから、階下へ降りる階段の
途中で、すぐに追いつくことができました。

でも、どう声をかけていいのかわかりません。それに、もっと重大な問題もありました。声です。

ふだんから、男にしては声が高い方だと言われますし、電話などでは、よく女性とまちがわれたりもします。でも、女装して人と話したことなどありません。ましてや10代の女の子として通る自信はありません。で、ボクは、階段を降りた後も、黙ってその男の子の1メートルほど後をついて歩いていました。

と、改札口の手前で、突然、その子が立ち止まり、振り向いたのです。

「……あ」

びっくりしてボクも足を止めました。

「……なに？」

男の子は、そう言いました。

ボクは、どうしたものか、本当に困ってしまいました。また心臓がどきどき脈打ってきました。ボクは、

スポーツバッグをスカートの前で両手で持ち、うつむいたまま、黙っていました。

「……」

男の子は、ボクがなににか言うのを待っているようにでした。

「あの……、ありがとうございました」

ボクは聞こえないくらい小さな声でそう言って、ぺこんと頭を下げました。

「いいよ。君があんまり困っているみたいだったから
……。ごめんね」

「……え？」

ボクは、男の子が言った「ごめんね」という言葉の意味がわからず、その顔を見上げました。その子の顔をまともに見たのは、その時が初めてです。

「なんか、かえって恥ずかしい思いさせちゃったんじゃないかなって……」

その子は、真ん中から分けたさらさらの髪の毛を、かき上げるようにしてそう言いました。

なんか、感じのいい子だな……。

ボクは、背の高いその男の子を見上げて、そう思いました。

「ううん、そんなことないです。ほんとに、ありがとうございます」

自然に、そんな言葉が口をついていました。で、言

ってから、しまったと思いました。

でも、男の子は、ボクの声になんの不審も抱かなかつたようです。つづけて、こんなことを言ってきたのです。

「ねえ、二人でエスケープしない？」

「えっ？」

ボクが聞き返すと、男の子は、また、別のことを聞いてきました。

「その制服、S女子高校だろ？」

「……え、ええ」

ボクは、どきりとしながら答えました。

「こんな時間に渋谷にいたんじゃないや、一時間目も間に合わないじゃん。じつは僕も、今日は大遅刻。もう、学校行くのやめようかなと思ってたところ」

「……」

「君も、そうしない？」

「……」

思わぬ言葉に、ボクはまた困ってしまいました。

仮にもボクは教育者。高校生が学校をサボることに協力するなんていうのは、ちよつとナンです。（そもそもすでに、教育者にあるまじき行為をやってるわけですが……。）

それにこれは、明らかにデートの誘い。ナンパです。ボクは、困惑した顔で男の子を見ていました。

…そんなこと、絶対ダメだ。

…でも、カレ、痴漢さんにあつてたところ、助けてくれたわけだし。

…なに言つてんだ。自分で仕掛けたくせに。

…だけど、さつきは、ほんとに困つてたんだから。

…男だつてこと、ばれちゃつたらどうすんだよ。

…だって、あたしのこと、女の子だつて、信じ切つてるみたいよ。

：：わかってんのか。ボクは23歳の男で、しかも高校教師。高校生の男とデートなんて、なに考えてんだよ。

：：でも、この子、ちよつといい感じじゃない。

——と、要するに、ボクの中で、こんな葛藤（なんだかなあ：：）があったわけです。

で、けつきよく：：

「君だって、S女子の方向とは逆向きの電車に乗って

たんだし、ほんとのこと言って、サボるつもりだったんだろ」

男の子の言葉に、ボクは、つい（ほら、はじまった）、肩をすくめ、はにかんだように微笑み返していました。

「僕、竹井明。M高校の三年」

ボクが、精算所で追加料金を払って（なにしろ渋谷まで来る気なんてなかったわけですから）いると、男の子は隣でそう名乗りました。M高校は、有名な受験

校です。

「君は？」

「……え？ ……ひとみ」

ボクは、パソコン通信の時使っている女性名を、思わず口走ってしまいました。

「名前の方だけ？ 僕のこと、警戒してんだ」

改札口に並んで、明クン（もう、いきなり呼び方が変わるんだから）は、そう言いました。

ボクがまた肩をすくめてみせると、明クンは、ちよつと笑い返して、別の質問をしてきました。

「S女子の何年生？」

「二年」

それは、要するにボクが担任している学年です。どうせ年をごまかすんなら（年だけじゃないですが）、明クンより年下の方がいいかな、と思つたわけです。

「ふうん……」

ボクの言葉に、明くんは、ちよつと意味ありげな顔で答え、自動改札を先に出ました。

ボクは、自然に、そのあとをとことことついて行く形になりました。

「映画でも見る？」

西口を出て、横断歩道の信号待ちをしている時、明くんがそう聞いてきました。

「……」

ボクはまたまた困ってしまい、明クンの顔を見上げました。

午前中に学生服で映画館に入るなんて、「補導してください」と言っているようなものです。（なにせ教師ですから、そのへんは敏感なんです。）警官や補導員に捕まって身元調べでもされたら、大変なことになります。明クンの方はまだしも、ボクは……。

ところが明クンは、「うん、そうしよ」と、勝手に一人で決め、さっさと道を渡りだしたのです。

で、ボクはしかたなく、びくびくしながら、その後について行きました。

明クンがあまりにも悪びれず、堂々としていたせいでしようか。途中、パトロールの警官とすれちがったのですが、なにも聞かれませんでした。

それに、映画館の窓口でも学生服であることになん

のどがめだてもされず、おまけに学生証も見せないのに（なにしろボクはそんなもの持ってません）、高校生料金で入れてくれました。

もつとも、こんなに早い時間からやっている映画は他になく、ボクたちが見たのは「春のドラえもんまつり」だったりしたのですが……。 （それにしても、23歳の男が、セーラー服着て、6歳年下の少年と「ドラえもん」を見ている図というのは、なんとも壮絶なも

のがあります。」

まあ、とは言うものの、「ドラえもん」はけっこう面白くて、ボクは隣の明クンを気にして身を固くしながらも、わりと楽しんでしまったのです。

映画が終わって、ボクたちはハンバーガーショップで昼食（高校生らしいでしょ……なんて）をとりました。

「わりと、おとなしいんだね」

ビッグマックをほおぼりながら、明クンが言いました。

「そう……？」

大きく口を開けないように気をつけて、ファイル・オ・フィッシュを食べながら、ボクは明クンを見ました。

「あんまり、しゃべんないしさ」

「人見知りする方、なの」（よく言います。）

「猫かぶってる？」

「え？……ええ、ちよつと。こんなこと、初めてだし」
(そりや、そうだ。)

「なにが？　学校サボること？　それとも、男と歩くこと？」

「両方。幼稚園から女子校だし」(まあ、ぬけぬけと。)

「へえ、そうなんだ。ずっとS女子？」

「ええ」

……なんて、ボクは、明クンに対して、大ウソツキ

大会を始めてしまったわけです。

で、そのあとボクらは、ハンズやパルコをのぞき、代々木公園をぶらぶらしたりして午後の時間を過ごしました。

その日は、散り残った桜の花びらが春風に舞う気持ちのいい日で、脚の長い明クンに合わせて小走りに歩くと、セーラー服のプリーツスカートが素足の膝小僧あたりをやさしく撫で、ボクはそれだけで、なんだか

うきうきしてしまいました。

その間、明クンはなんやかやとボクのことを聞きたがり、ボクはさっきの調子で、あまりはつきりしたことは言わず、男を知らない「ちよっとお嬢様」ふう女子高生を演じていたわけです。

いつばれるかときどきしながらも、ボクは、明クンとのデートを楽しんでいました。はつきり言ってこれは、朝方の「痴漢さん挑発ごっこ」なんかより、ず

つとわくわくする出来事でした。

明クンは頭からボクのことを女の子だと信じ切っているようで、それに合わせて振る舞っているうち、ボク自身も、なんだか自分が本当の女の子のような気がしてきました。

明クンに顔を見つめられるとどきまぎし、歩いていく時、明クンの手がボクの手に触れたりすると、びくっと全身が緊張するのです。（まったく、恥ずかしげ

もなく、よく書きます。)

こんな感覚は、自分の部屋で女装している時や、夜中に女装外出した時には絶対に味わえなかったことです。

いえ、女装している時の感覚というより、むしろ、中学時代、女の子と初めて二人きりのデートをした時の感じに近いと言った方がいいでしょう。

そんなふうに我を忘れていたせいか、ただぶらぶら

歩いていただけなのに、気がついた時には、もう四時半になっていました。

「あたし、そろそろ帰らなきゃ」

ラフォーレのレコードショップでCDを見ながら、ボクは言いました。

「え、もう？」

「うん。学校から家に連絡入ってるといけないし」

「また、会える？」

明クンは、けっこう真剣な眼差しで、そう聞いてきました。その言葉にボクが躊躇していると、明クンは重ねて言いました。

「電話番号、教えて」

「え？　：：う、うん。あとで書くわ」

ボクはそう言って話を打ち切り、また、CDの棚に目を戻しました。そして、頭の中で、今日のデートの結末をどうつけるべきかを考えていました。

むろん電話番号を教えるつもりはありません。ボクは一人暮らしで、家族を気にする必要はないのですが、まさか電話がかかるたびに女の子のしゃべり方で出るわけにもいきません。

それよりなにより、ボクは、こんなことはもうこの日かぎりになしようと思っていたのです。

ボクも一応は教育者です。いくらわくわくするほど楽しくても、こんな馬鹿な遊びをつづけるのがまとも

でないというくらいはわかります。

「ちよつと、お手洗い行つて来るね」

ボクは、何気ない感じで明クンにそう言い、その場を離れました。

そして、そのまま、原宿の駅に向かったのです。

——と、こんなふうにはボクのひそかな冒険の一日は終わりました。そして、その時決意したとおり、ボク

は、セーラー服で遊ぶのをそれ以後やめました。

女装は相変わらずつづけていましたが、以前のように、自分の部屋で、どちらかと言えば、セクシー路線で楽しんでいたのです。

ところが、それから一カ月後、ボクは、思わぬところで明クンと再会することになるのです。

五月のゴールデンウィークも終わったある夜、ボク

は、自宅のパソコンの前に座っていました。

その日は、教員組合の会合があり、帰宅がいつもより遅くなったので、女装はせずに、パソコン通信を楽しんでいたというわけです。

ボクは全国的な大ネットワークより、小規模BBSと呼ばれるローカルの通信ネットにアクセスするのが好きなのですが、その夜は、最近加入したばかりの東京を中心とした某ネットの電子掲示板のリストを、な

んとはなしに読んでいました。

と、その中に、三週間ほど前に書かれたこんなタイトルがあったのです。

「魔女っ子ひとみちゃんはどこに？」

書き込んだ人のIDと名前を見ると、ASTO10
4..竹井明Vとあります。

ボクはぎくりとしました。あの時の明クンと同姓同名です。

とにかく、そのタイトルのナンバーを指定し、文章を読み出しました。中身は、こんな内容でした。

義理と人情と善意に満ちたネットワークカーのみなさん。どうか、フラれ高校生の願いをかなえてやってください。

じつは先々週の水曜のこと。僕は渋谷で、ある女の子をナンパしてしまいました。それはもう、ほんとに

かわいい子で、それも、どこか神秘的な魅力のある子でした。あまりしゃべらず、おとなしい子なのですが、心の中になにかを秘めているようで、そのくせ、ときどき恥ずかしそうに笑う笑顔が、どうしようもないくらいに無邪気でかわいくて……。僕はもう、ほとんど一目惚れ状態でした。

ところが、しばらくデートしたあと、その子は、僕の前からコッゼンと姿を消してしまったのです。

まるで僕は、魔法にでもかけられたような気分です。今でもあのかわいい顔が目の前にちらついて、なにも手につきません（受験だっていうのに……）。

もう一度会いたいんです。それなのによく考えてみると、僕はその子のこと、けっきよくなにも聞き出していなかったのです。わかっているのは「ひとみ」という名と、S女子高校の二年生らしいということだけ。身長155cmくらいのもつてもかわいい子です。

もし誰か心当たりがあったら、僕にメールをください。本当に本当にお願ひします。

ディスプレイ上のその文章を読みながら、ボクは、ひとりで赤面していました。

だってそうでしょう。これだけの文章の中に、「かわいい」という言葉が四回も使ってあるんですよ。

その上、「神秘的」で「無邪気」なボクに、明クン

は「一目惚れ」して、「なにも手につかない」というんです。

これだけ言われれば、女の子なら誰だって胸ときめかすでしょ（都合いい時は、すぐ女の子になるんです）。

それに、文章からは明クンの気持ち切々と伝わってきます。タイトルと最初の部分は冗談みたいに書き出しておきながら、最後はネットの仲間への本気のお

願いになってしまっています。

少年のこんな純粹な悩みには、教育者たるもの、応えないわけにはいきません（都合次第で、すぐ教育者にもなるんです）。

で、ボクは、ちよつと迷った末、けつきよく、明クン宛にメールを送信してしまいました。電子メールのやりとりだけなら、正体がばれることもないだろうと思つたのです。

さいわい、そのネットには「ひとみ」という女性名で登録してましたから、メールを出すのは簡単です。

当の「ひとみ」からメールが来るなんて、明クンは思ってもいないでしょうから、そんなメールを受信したら、落ち込みから立ち直って、いっぺんに元気になるにちがいありません。これで悩める青少年をひとり救えるというものです。（なんか、すごい論理だなと、自分でも思います。）

で、出してみると、案の定、明クンからは小踊りせんばかりのResがありました。

——と、ここでやっと、当初の目的だった梨乃さんへの「相談」にたどり着きました。でも、また書きすぎて、メールの字数制限いっぱいです（痴漢の話なんか、事細かに書いているから、こういうことになるのです）。

とにかく、そのあと、今も、高校生の「ひとみ」に成りすましたボクは、明クンとパソコン通信での交信をつづけています。

そのやりとりの詳細は次の機会に書くとして、最後に急いで梨乃さんにアドバイスしていただきたいことを書いておきます。

明クンは最初のメールから「もう一度会いたい」と、そればかり繰り返してきます（それは、ある程度

予想していたことですが。そしてボクは、あれこれ理由をつけては、それを断りつづけています。でも、最近では、もう断りきれなくなってきました。

それに、率直で誠実な明クンをだましているのが、なんだか心苦しくもなってきました。

梨乃さん、ボクはどうしたらいいのでしょうか？

このまま、明クンとのメールのやりとりをつづけていていいのでしょうか。

それとも、すっぱりとやめるべきなのでしょうか。
あるいは、それとも……。

Res、待っています。

3 通目のメール

梨乃様

Res、ありがとうございます。

IDナンバーYTAA00416の松沢仁志です。

なんだか、お忙しいとのこと。本業以外に小説も書いてらっしゃるわけですから、さぞやたいへんだらうと思います（そういえば、「QUEEN」誌の「編集後記」で、原稿が集まらないというコメントがある時って、必ず梨乃さんの名前が登場しますもんね）。

それなのに、パソコン通信の電子メールなんかで、愚にもつかない相談を持ち込んでしまつて申し訳ありません。わざわざあんな長文のアドバイスをいただき、

恐縮してしまいました。

「23歳の男性でセーラー服が似合って、しかも、高校生の男の子にも見破られないなんて、ほんとうにおきれいでかわいらしい方なんでしょうね」なんて書いてくださって、うれしかったです。

にもかかわらず、ボクは、梨乃さんに申し訳ないことをしてしまいました。

じつは、あんな相談をしておきながら、梨乃さんが

「いちばん避けた方がいい」と書いてきてくださったことを、それより先にしてしまったのです。

梨乃さんの R e s が遅かった（すみません、こんなこと言つて）こともあるのですが、要は、ボクがお調子者で優柔不断なのがいけないのです。

とにかく、今日はそのへんの経緯を書きます。どうか、見放さずに読んでやってください。

この前書いたように、パソコン通信の某ネットで「ひとみという女の子を捜してほしい」という明クンの書き込みを見つけたボクは、迷った末、明クンのID宛にこんな電子メールを出しました。

竹井明様 ↑ひとみ

ほんとうにびっくりしてしまいました。まさか明クン（こう呼んでもいいですよ）が、パソコン通信を

やってたなんて……。明クンの書き込みを読んだときには、もう心臓が止まりそうなくらい驚いて、そのあと、ものすごくうれしくなって、それから、ちよつと恥ずかしいなって思いました。だって、あたしのこと、あんなふうに書いてくれるんだもの。

あたしはそんなにかわいくなんてありませんし、もちろん、明クンに魔法をかけたりなんてしてませんよ。とにかく、あの日は、突然消えてしまつてごめんな

さい。

じつはあのあと、ラフォーレのトイレで、偶然、学校帰りのクラスメートに会ったのです。その子はあたしを見るなり、「ひとみ、たいへんよ」と教えてくれました。あたしが無断で学校を休んだことで、担任が家に電話したというのです。あたしはもう真っ青になつてしまいました。

「サボるんなら、仮病の電話でも入れとけばいいのに」

なんて言うクラスメイトに、お礼を言うヒマもなく、あわてて家に電話しました。

もう、ママはかんかんでした。

「いいから、すぐに帰ってらっしゃい」

ママに強い口調でそう言われて、あたしは、そのまま原宿の駅に向かって駆け出していました。

けっして明クンのことを忘れていたわけではありません。でも、あの時のあたしは、一分でも早く家へ帰

らないと、という気持ちでいっぱいだったのです。それで、明クンには悪いなと思いつながら……。ほんとにごめんなさい。

明クンには理解できないかもしれないかもしれませんが、とにかく、あたしの家はものすごくきびしいのです。

あの日も、家に帰ったあと、ママは、「あなたがこんな不良になるなんて……」とかって、泣きながら怒るし、パパは、帰って来るなり怒鳴りつけるし……で、

あたしは、ただ黙ってうなだれているだけでした。

その上、あの日以来、あたしは「謹慎」させられています。学校が終わったら、どこへも寄り道せずまっすぐ帰るように言われ、日曜も、家から一步も外に出してもらえません。

そんな暮らしを送りながら、あたしは、ずっと明クンのことばかりが気になっていました。なんとかあの時のおわびがしたいと……。

でも、あたしの方も、明クンのことはほとんど聞いてなかったし、連絡の取りようもありませんでした。

そんな時、パソコン通信で、明クンの書き込みを見つけたのです。

あたしがどれほどうれしかったか、わかってもらえるでしょうか。

明クンと会ったあの日は、あたしにとって、これまで生きてきたうちでいちばん楽しい一日だったと言っ

てもいいくらいです。だから、あたしだって、会えるものなら、今すぐにでも明クンと会いたいと思っ
ています。

でも、そんな事情で、あたしは家を出られそうに
ありません。

あたしはこれまでずっと、家でも学校でも「いい子」
でした。だから、パパやママは、あたしがたった一日
学校をサボっただけで、ものすごくシヨツクを受けて

います。そんなパパやママを裏切って「悪い子」になる勇氣なんて、やっぱりあたしにはないのです。

ごめんなさい。

でも、いいことだってありますよ。

明クンもあたしもパソコン通信をやったなんて、これはきつと神様のめぐり合わせなんだと思います。

通信でなら、いつだって会えるということでしょう。

これからもメールのやりとりなんかできたらいいと思

います。

Res、待ってます。

P・S もう一度――

ごめんなさい & ありがとう。

どうです。女の子らしい手紙でしょ（ウソばっかりですが）。あの日いなくなつた理由も、今後会えないというわけも、明クンの気持ちを傷つけることなく、

すべてクリアしています。その上「ひとみ」の人間像を、ちゃんとした家庭で大事に育てられた心の優しい少女として描いているところなんて、我ながら大した文章力です。（すぐ調子にのるボクです。）

とにかくボクは、五月中旬のある夜、こんなメールを、パソコンネットを通じて明クンに送ったわけです。と、翌日、すぐに返事がありました。

ひとみ様 ↑ 明

僕の方こそ、本当にびっくりしました。ひとみちゃん（僕もこう呼ばせてもらいます）が、通信をやって、しかも同じネットのメンバーだったなんて、最初は信じられませんでした。

もしかしたら、誰かが偽名を使ってイタズラしてるのかなとさえ思ったんだよ。そういうことって時々あるっていうし、同年代の女の子でパソ通やってる子な

んであんまり聞かないしね。

でも、僕の書き込みにはなかったこと（学校をサボったことやラフオーレに行ったこと）が書いてあるのに気がついて、それを知っているならひとみちゃん本人にちがいないと思ったんだ。

そしたらもう、夜中だというのに、大声で叫び出したくらいにうれしくなつて……。

会った時はそんなふうに見えなかったけど、パソ通

なんかやってたんだね。

僕は去年の誕生日にオヤジにねだってノートパソコンを買ってもらってから始めたんだけど、ひとみちゃんにはパソコン通信歴はどのくらい？

僕は、親には「受験勉強してる」とか言って、しよつちゆう通信やってるから、もうベテランと言ってもいいくらいなんだ。もしひとみちゃんが始めたばかりなら、いろいろ教えてあげられることもあると思うよ。

とにかく、これから、毎日メールの交換ができるね。

もしよかったら、チャットなんかもやってみない？

それから、お父さんやお母さんに怒られてしまったらしいけど、大変だったね。なんか、僕も責任感じちやうな。ムリヤリ誘っちゃったわけだし。

でも、ひとみちゃんが書いてたこと、ちよつとオーバーだと思う。ただデートするだけで、親を「裏切」って「悪い子になる」ことになるの？

また学校サボろうなんて言わないから、日曜にでも会えないかな？

通信で話せるのはうれしいけど、コンピュータ相手じゃ、顔が見えないだろ。僕は、ひとみちゃんの、名前のおり大きな瞳や、ちよつとハスキーな声が忘れられないんだ。絶対、また会いたい。

とにかく、これから毎日メール書くから、ひとみちゃんもResください。

あんまりうれしいんで、今夜は寝れそうにない「明クン」でした。

BYE

明クンが有頂天になっているのが目に見えるようなメールでしょ。最初こそ「です・ます」調で書き始めているものの、気持ちがあせっているものだから、すぐにくだけた調子になってしまつて。なんか、かわい

いですよね。

ボクからのメールを受け取って、夜中なのに「叫びだしたいくらいにうれしく」なって、ボクの「大きな瞳」と「ハスキーな声」が忘れられなくて、「絶対また会いた」くて、「今夜は寝れそうにない」んですって。：：うふ：：（いけないいけない。いきなり女の子になってる）。

とにかく、あの書き込みもそうでしたが、このメー

ルも明クンの気持ちも素直に出ていて、最近の高校生にしては文章もまともだし、ボクは教師として好ましい印象を持ったのでした（今度はいきなり先生になるんだから）。

でも、明クンの「会いたい」というまっすぐな気持ちには、ちよつとたじろいでもしました。これから先、どうやって断ろうかと……。

……あ、それから、梨乃さんはパソ通はじめたばかり

りだそうですから、解説がいますね。中に出てくる「チャット」っていうのは、別名「RT」。つまり「リアルタイム会議」のことです。長めの文章を送り、相手が後で読む「電子メール」とちがって、同じ時刻に両方がパソコンに向かって、交互に文章をやりとりし合う形式の通信。

電子メールを「手紙」だとすると、チャットは、ちようど無線の「ハム」みたいなものです。

——話を元に戻します。

明クンのメールを読んで、ボクも、すぐまた返事を
書きました。

明クン ↑ ひとみ

Res、ありがとう。

うれしくって、また、何度も何度も読み返してしま
いました。

あたしがパソコン通信を始めたのは、コンピュータ好きの兄の影響。もう二年になります。あんまり熱心にやってるほうではありません。きつと、明クンに教えてもらわなければいけないこと、たくさんあると思います。

それに、これからは、明クンとお話しできるのだから、コンピュータに向かう機会も多くなりますね、きつと。

でも、ちよつとだけ心配。明クンは受験でしょ。あたしなんかとこんなことしてていいの？ あたしはうれしいけど、あんまりむりしないでね。

それから、やっぱりあたしは明クンに会えそうもありません。家を出られるのは、学校へ行く以外、ママといっしょにお買い物に行く時くらいなの。

この前のエスケープ事件以来、パパやママはひどく神経質になっていて、いつも、あたしの行動に目を光

らせています。

あたしのパパやママは、ものすごく古いところがあるの。まだ高校生のあたしが、特定の男の子とつきあうなんて、ぜったい許してくれないと思います。あたしに勇気がないだけなのかもしれないけれど……。

どうぞ、わかってください。

……

まあ、このあとは、おんなじような内容がつづくので、省略します。

とにかく、こんなメールを明クンとの間で、一ヶ月近く毎日やりとりしていましたが（今もしつづけていますが）。

時には早起きして、明クンに誘われた「チャット」もしてみました（どうして「早起き」になるかというと、チャットの場合、基本的にネットメンバーの参加

は自由なので、ふたりで会話していても、他のメンバーが割り込んでくるのがよくあるのです。それを避けるには、通信している人の少ない早朝がいちばんなのです。

六月下旬のある朝（四時くらいだったかな？）、ふたりで交わしたチャットの記録が、ボクのハードディスクに残ってますので、ちよつとだけ転載します。

明Vおはよ

ひとみVちゃんと起きたね

明Vそりや、ひとみとの約束だもん

ひとみVエライエライ

明V今日も、また雨みたいだね

ひとみV梅雨だもの

明Vいつ明けるのかな

ひとみVまだじゃない。去年も長かったし

明 V 梅雨が明けたら、会える？

ひとみ V また、その話題？

明 V だって……

ひとみ V ごめんね

明 V あやまつてもダメ

ひとみ V だって……

明 V けつきよく、ひとみは、ボクのことなんてどう

でもいいんだ

ひとみVなに、すねてるの？

明V会ってくれないし、未だに住所も教えてくれない

い

ひとみV教えたなら、明クン、来ちゃいそうだもん

明Vそりゃ、すぐ行くさ

ひとみVほら

明Vなんなら、学校の前で待ち伏せしてもいいんだ

よ

ひとみVそんなの、困る

明Vひとみが会ってくれないからだ

ひとみV：：ごめん

明V会いたい、会いたい、会いたい、会いたい

ひとみVいつも、途中からこんな会話ばかり

明Vだって、会いたいんだよー

：
：
：
：
：

これも、おんなじようなことばかりつづくので、このへんでカット。

チャットは、文章を手で打ち込みながら会話するので、どうしても簡単な言葉ばかりで、センテンスが短くなります。そのせいで、チャットを始めてから、お互いの言葉づかいから、他人行儀なところか消えてしまいました。呼び名にしても、ボクは明クンのことをずっと「明クン」と呼んでいます。明クンの方は、

いつのまにか「ひとみ」と呼び捨てするようになりま
した。

文章とはいえ、リアルタイムでそんな会話をするに
は、やはり神経を使います。明クンが「ひとみ」の家
族構成だとか、小さい頃の思い出だとか、いろいろ聞
いてくるので、ボクは一生懸命「ひとみ」という女の
子の人間像をつくりあげ（要するにウソ八百なのです
が）、しかも以前言ったことと矛盾しないように気を

つけていなければなりません。

その結果、ボクは、どんどん「ひとみ」に感情移入していき、コンピュータに向かうときは、精神的には、完全に女の子になりきっています（そのせいで、実際に女装する回数は、かえって減ったのですが……）。

それから、明クンの「会いたい攻撃」にもちよつと参りました。どうやら明クンは、キーボードのなにかのキーに「会いたい」という単語を記憶させているら

しく、この言葉だけは、すごい速さで打ち込んでくるのです。ボクは、そう言われるたびに、謝ったり、ごまかしたり、言い訳したりしなればなりません。

要するに、メールにしてもチャットにしても、明クンはただひたすら「もう一度会いたい」と言って来るのです。

ボクがこの前の梨乃さん宛のメールで「どうしたらいいでしょう」と相談したのは、ちようどこのころ

です。

で、そのすぐあと、七月のはじめごろのこと。やはりチャットで、こんな会話がありました。

明V 期末試験、明日で終わり

ひとみV あたしの学校は、おととい終わったよ

明V 明日、昼までだから、S女子高校まで行く

ひとみV え、ダメよ

明Vどして？

ひとみVみんなに見られるもん、恥ずかしい

明Vいいじゃん、見られたって

ひとみVそんなの困る

：
：
：
：
：

そのあと、ボクは必死で明クンを思いとどまらせよう
うとしました。校門前で待ち伏せしても、明クンは当

然「ひとみ」には会えません。まあ、それはあとで言い訳できるとしても、もしそこで、明くんが下校する生徒に「ひとみ」の所在を聞いたとしたら、「ひとみ」なんて実在しないことがわかってしまいます。あるいは、男姿のボクを目撃したとしたら、いっぺんにこの仮面劇の仕掛けがばれてしまう可能性だってあります。（それは、たぶん大丈夫な気がしますが……。）

で、そんな押し問答が、しばらくつづいたあと――

：
：
：
：
：

明Vぜったい行く

ひとみVダメ

明V行く

ひとみVダメだったら

明Vじゃ、今度の日曜

ひとみVえっ？

明V会おう

ひとみV無理よ

明Vそれなら、明日学校行く

ひとみVそんな：：

明V会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会

い
たい、会

いたい

ひとみVまたあ

明V会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい、会いたい

たい

ひとみVもう。わかったわ。今度の日曜ね

明Vえ、ほんど？

.....

けつきよくボクは根負けしてしまっただのです。これ

以上拒否しつづけたら、明クンは必ず学校まで押し掛けてくるだろうと思ったからです。

……というより、女の子になりきっているボクが、明クンの無邪気なほどの真剣さにほだされたのかもしれない。なんだか、明クンがかわいそうに思えてきたのです。

で、そのあと一気に、会う時間や場所まで約束させられていました。

ボクは内心「どうしよう」と思いながら、一方で、この一ヶ月ほどの間、胸につつかえていたものがとれたような気もしていました。

さあ、それからが大変です。

日曜日にデートの約束をした以上、今度は、この前のようにセーラー服で出かけるわけにはいきません。ところが、ボクの手持ちの女物の服は、どれも大人つ

ぽい（あるいは、露骨にセクシーな）ものばかりなのです。女の子らしいかわいい服や、小物だって揃えなければなりません。

で、翌日からボクは、仕事帰りにせっせとティーンズショップまわりをするはめになりました（もちろん、なるべく職場から離れたところを選びました。だって、もし生徒に目撃されでもしたら大変でしょ）。

ティーンズの服は、たいていどれも、ふだんボクが

買うものより安いには救われましたが、ボクにはどんなものを選べばよいのかよくわかりませんでした。で、けつきよく、何着も買ってしまい、コンピュータの周辺機器を買うつもりだった夏のボーナスのほとんどを、そのために使ってしまった。

そのうえボクは、下着もティーンズ用のにしなければいけないような気がして（なに考えてんでしょうね）、ふだん利用しているちよつとエッチなランジェ

リーショップ（男の客も多い店です）ではなく、恥ずかしい思いをしながら、デパートでブラやミニスリップを買い揃えました。

夜は夜で、十代らしい肌に見えるようにと、脱毛や基礎化粧品などをいつもよりさらに念入りにしました。

そのせいで、その数日間は何も手につきませんでした（でも、正直言えば、ボクはこれらのことをわくわくしながらやっていたのです）。

さて、当日。

ボクは早くから起きて、出かける準備をしました。

ゆつくりと風呂に入り、体中を洗い、すみからすみまで点検します。すね毛や脇毛は、前夜ていねいに処理したのですが、心配になって、バスルームの鏡の前で、腕を上げたり、体をひねって太腿の裏側を見たりと、まるでストレッチみたいなきことをしていました。

ヒゲはふだん一本一本抜いているので、あまり生えませんが。でも、この日は、顔のウブ毛剃りの意味もあって、シェービングしました。

風呂を出て、鏡台の前に座り、アストリンゼン系の制汗作用の強い化粧水で肌をしめます。それから、この前書いた、つけていても素肌に見えるというファンデとリップでメイクし、鏡を見ました。

顔はこの前と同じように自然に仕上がっていました

が、ボクは、目が気になってしかたありませんでした。明クンが「大きな瞳」と書いてくれていたことを思い出したからです。

まさか高校生が派手なアイメイクをするわけにもいかず、さんざん迷った末に、上まぶたにピンクのシャドーを少しだけ入れ、あとは、ビューラーでまつげをていねいにカールしました。

マニキュアも迷ったのですが、目立たない透明のエ

ナメルを塗ることにしました。

それから、買ったばかりの白いショーツとブラをつけ、カップにシリコンゴムのパッドを入れます。スリッパはどうしようか考えた末、天気予報で日中暑くなると言っていたので、思い切ってやめることにしました。

それでも鏡を見ると、ショートヘアのままなのに、すっかり少女に見えるシルエットができあがっています。

した。

ボクは、自分がなで肩で華奢な骨組みをしていることに感謝しながら、洋服だんすを開けました。

じつは前夜のうちに着ていく服を決めていたのですが、ここでもボクは、また迷ってしまいました。けっきよく買った服をもう一度全部出して着てみて、その中からやっと一着を選び、ウイッグをつけてから、さらに別のと取り替えたりしました。

女の子の「お出かけ」は、本当に大変です（すっかりその気、です）。

最終的に選んだのは、白いだぶつとした木綿の半袖ブラウスにグレーのスカートという、わりと平凡なものでした。派手な色使いのワンピースなんかよりこの方がかわいく見えるのは、ボクのかわいらしさが本物だということでしょうか（また調子にのって……）。

ヘアスタイルは、この前と同じように前髪だけ自分

の髪をカールして額にたらし、その上からストレートロングのウィッグをかぶりました。この前とのちがいは、自毛とウィッグのさかいめあたりに、白いヘアバンドをしたということです。

赤いベルトとポシエットふうのショルダーを全体のアクセントにし、足元は、りんごのワンポイントがかわいソックスにスニーカーをはきました。

幼すぎる気もりましたが、高校生が最初のデートに

出かける服としては、清潔な感じがいいなと思いましたが。

「いってきまーす」

ボクは玄関の鏡の前でもう一度点検したあと、小首を傾げてそう言ってみました。微笑んだ顔が、ちよつとはにかんだように緊張していました。

昼間の外出は二度目でもあり、この前のセーラー服

の時とくらべれば、ずっと落ちついていました。でも、この前より、すれ違う人の視線がこちらに向けられることが多いような気がします。半袖ブラウスは大きめで、衿もとや袖口が開いていましたし、スカートも、セーラー服のよりはずっとミニだったからかもしれませんでした。

ボクは、男っぽい仕草が出ないように、かといって、あんまり大人の女っぽくならないように、「ちよつと

おてんばな女の子」をイメージして、かわいく快活に振る舞うようにしました。

とにかく、駅へ向かう道でも、それから電車の中でも、ボクはまわりからの視線を感じていました。それは、この前と同様、ボクの正体を疑っている目ではなく、ボクのことを「女の子として」気にしている目です。特に、十代の男の子がこちらをちらちらうかがっていたところをみると、やっぱりボクは掛け値なしに

かわいいのだと思い、うれしくなってしまうました。

(自意識過剰ですね、まったく。)

東京駅に着き、京葉線のホームへ向かう長い長い通路の、動く歩道に乗っている時です。

「おはよ」

後ろから肩を軽くたたかれ、振り返ると、明クンが立っていました。

ボクたちは京葉線のホームで待ち合わせていましたから、べつにここで会っても不思議ではないのですが、まだ心の準備ができていなかったボクは、どぎまぎしてしまいました。

「よかった。別人だったらどうしようかと思った。この前と服ちがうし……」

明クンは、息を弾ませながら言いました。たぶん、ボクの後ろ姿を遠くから見て、動く歩道の上を走って

きたにちがいありません。

「家、よく出られたね」

明クンはそう言いながら、ボクの横に並んで立ちました。

「うん、お友だちと図書館行くなってウソついちゃった」
ボクは低い声にならないように注意しながら、言いました。

明クンは、にっこりと笑って、うなずきました。

ボクは、背の高い明クンを見上げて、照れたように微笑んでいました。真っ白なTシャツにジーンズという明クンの飾らない服装が、すっきりした顔立ちとさらさらの髪に似合っていました。

内心どぎまぎしながらも、明クンの顔に見入っていったせいでしょうか。ボクは、動く歩道の終点に気づかず、そこでつまづいて、ちよつと前につんのめってしまいました。

「あっ……」

「あぶない」

ボクはその瞬間、さっと差し出された明クンの手に取りすがってしまいました。

「だいじよぶ？」

「……あ！」

明クンの手を両手で握っていることに気づき、ボクはあわてて、その手を引っ込めようと思いました。

ところが明クンは、ボクの右手を握り返し、先に立って歩き出したのです。

「行こ、早くしないと快速出ちやうよ」

ボクは、明クンと手をつないで、京葉線の階段を降りていました。

——と、またいいところで（なにがいいんだか）、メールの字数制限いっぱいになってしまいました。

この続きは、また今度のメールに書きます。

しかし、梨乃さんもきつとあきれていることでしょうね。ボクだって、なんだかずるとこんなことになっちゃって、困惑しているのです（自分のせいですけど……）。

また、梨乃さんの意見、聞かせてください。厚かましいことを言うようですが、できれば、今度は早めに。

4 通目のメール

梨乃様、お元気ですか？

IDナンバー、YTA00416の松沢です。

この前は「早めにResください」なんて、厚かま

しいこと書いてしまいました。梨乃さんはやっぱりお忙しいのでしようね。Resがないので、またボクの方から書いています。

じつは、今夜はなんだか気持ちが悪く落ちて、誰かに話したくてしようがないのです。

この前メールを出してから一ヶ月半、ボクはずいぶん変わりました。早い話が、今パソコンに向かってこのメールを書いているボクの格好は――

上は、チェリーピンクのシルクのタンクトップ。光沢ある生地が、つんと上を向いたバストの先で光っています。

ちよつと日に焼けた首筋あたりで切りそろえた髪は、なんと自毛で、毛先はきれいに内巻きになっていきます（伸ばしてみてわかったのですが、ボクの髪は軽いくせつ毛らしく、このくらいまでになると、自然にこうなるのです）。

スカートは、明るいグレーのミニ。そこから、素肌のきれいな両脚が、パソコンラックの下に伸びていきます。

キーボードを打つ手の手首には（明クンからもらった）プロミスリングが揺れています。

——つまり、ボクは今、女の子スタイルのまままでこれを書いていきます。じつはさつき、明クンとのデートから帰ってきたところだからです。

このところボクは、三日とあけずに明クンに会っているのです（もちろん、女装して、16歳の「ひとみ」になって、です）。

それはたぶん、「夏」のせいです。

教師は、他のサラリーマンとちがい、夏には長い休みがあります。会議とか研修とか計10日くらい出勤すれば、それ以外の30日前後は自由に使えます。

そして、明クンもまた高校生。三年ですから受験勉強

強があるにしても（どうやら相当デキる子らしい明クンは）、基本的に自由です。

その結果、夏の太陽に誘われるように、ボクは女の子になって、明クンとのデートに出かけてしまいます。いけないのは夏なのです。（まったくなんて言い訳でしょう。ほんとにボクは恥知らずなヤツかもしれません。）

この前いただいたメールで、ボクの行動をずいぶん

心配してくださっていた梨乃さんには申し訳ないけれど、ボクは夏に負けそうです（ことに今夜は……）。

……とにかく（今夜の話をする前に）、この前のつづきから始めます。この前はたしか、ボクがこんなふうになるきっかけになった二回目のデートで、明クンと会ったところまででしたね。

東京駅で会って京葉線の快速に乗ったボクたちは、隣どうしの座席に腰掛けて、ずっと話していました。

会話の中身は、友だちがどうした、家族がどうした、あのバンドのあの歌がいいといった、高校生らしい他愛ない話題でした。

パソコン通信でのやりとりで、お互いのことは、よく知っている（もちろん、ボクの方は大部分つくり話なので）ので、会うのは二回目だというのに、会

話が弾みました。

とはいえ、ボクはやはり緊張していました。いくら明クンがボクのことを女の子だと信じきっているといつても、長時間至近距離で話せば、正体がばれる危険はじゅうぶんあります。

ボクは、ミニスカートの膝の上に置いたポシエットを両手で握りしめ、最初は言葉を選んで話していました。

でも、明クンはそんなボクの態度を、あまり男とつきあつたことのないバージンの女の子の恥じらいとでも解釈してくれたのでしよう。疑うどころか、ボクの緊張をほぐすように、ジョークを交えて会話をリードしてくれました。

おかげで、電車が幕張に着く頃には、ボクは十代の女の子になりきって、明クンの話に笑い転げていました。

幕張へ行ったのは、幕張メッセでパソコンソフトのショーが開催されていたからです。あまりデートにふさわしい場所とは言えませんが、パソコン通信が趣味の二人が出かける場所としては、とりあえず、ちよūdどよかつたのです（最初の頃のデートには、なにかと理由がいるものでしょ）。

広い会場にずらりと並んだソフトメーカーのブースを、人混みをかき分けながら熱心に見てまわる明クン

は、あとをついて歩くボクに、実際に操作しながらあれこれ説明してくれました。

じつはボク自身も新しいソフトには興味津々でしたし、一方で明クンが説明してくれたようなことはほとんど知ってもいたのですが、自分から手を出したりせず、明クンがやることにオーバーに感心してみせたりしていました。

「すごい。こんなこと、できるんだ」

「うわー、これ、画面がきれい」

「明クンって、ほんとによく知ってるのね」

その仕草や話し方が、あまりにも自然に女の子していることに、本当のところ、ボク自身が驚いていました。

たぶんこれは、ボクが条件に恵まれているからでしょう。

職業柄、見本にする十代の女の子なら（バージンか

どうかはべつにして、目の前にいくらでもいます。毎日、彼女たちを観察して暮らしているうちに、ボクの中に、女の子の行動パターンがしみこんでいるのかもしれません。

とにかくボクは、はた目からは、コンピュータ好きの少年に連れられてきたガールフレンドに見えたでしょう。

午前中を幕張でそんなふうにごろごりしたボクたちは、ふたたび京葉線に乗り、葛西まで戻りました。

駅前でサンドイッチとジュースを買って臨海公園に行き、木陰の芝生で昼食をとりました。

「お弁当、作ってくればよかったね」

芝生の上に横座りしてサンドイッチを頬ばりながら、ボクはそんなことを口走っていました。

一人暮らしが長いので、簡単な料理くらいはします

が、お弁当なんて作ったことはありません。でも、女の子になりきっているボクは、ごく自然にそんな発想をしたのです。

「今度、そうしよ」

明クンが言いました。

「うん」

ボクは、にっこり微笑んでうなずいていました。この時点でボクは、また会うことを承諾してしまったわ

けです。

「今度は、海かプールにしようよ」

明クンは、遠くに見える海水浴場の方を眩しそうに見ながら言いました。

「え？」

ボクは、返事に困ってしまいました。いくらなんでも、水着は無理です。

「……だめ。スタイル自信ないもん」

「そう……？」

明クンは、ちよつと体を引くようにして、ボクの全身を見ました。

「太ってないし、そのわりに、胸ありそうだし……」

「やだ……」

明クンの視線がバストのあたりに止まったので（それはもちろん、シリコンゴムのパッドでつくったふくらみなのですが）、ボクは、思わず両手でブラウスの

衿もとを隠すようにして、明クンをにらみ返してしました。

「ふふ、ふくれた顔もなかなかいい」

明クンは、いたずらっぽく笑い返してきました。

「もお！」

「おっと」

ボクが、片手を振り上げてたたこうとすると、明クンは身をかかわして、そのまま、芝生の上に仰向けに寝

ころびました。そして、さらにいたずらっぽく、ボクの顔を見上げてきました。

その顔を見て、ボクもつい、吹き出すように笑っていました。

そのあと、明クンは急にまじめな顔になって言いま
した。

「ひとみみたいな子、僕、はじめてだ」

明クンに見つめられて、ボクはなんだか恥ずかしく

なつて、目をそらし、芝生の上のサンドイッチの空パ
ックなどをビニール袋にまとめていました。

と、突然、明クンは、寝ころんだまま体の向きを90
度回転させ、なんと、ボクの膝の上に頭をのせてきた
のです。

ボクはびっくりしてしまいました。

だってそうでしょ。高校生の男の子を膝まくらする
なんて想像もしていなかったシチュエーションに、い

きなりなつたのだから。

おまけに、ボクがはいているのはミニスカート。その膝は、腿の三分の一くらいまでが露出しているのです。明クンの髪の毛が、素肌をくすぐります。

ボクがこわばったように体を固くしていると、明クンは、またいたずらっぽいで、しかも今度はちよつとはにかんだような表情もまじえて、ボクの顔を真下から見上げてきました。

その頭をむげに振り払うこともできず（もちろん、そんなことをする気もなく）、ボクも困惑した表情を残したまま、微笑み返しました。

そのまましばらく、ボクも明クンもなにもしゃべりませんでした。お互い目を合わさず、明クンは空を、ボクは海を見ていました。

じつは、横座りの上に膝まくらなんてことをして、ボクの体勢はすごく不安定でした（やっぱり男ですか

ら、横座りというのはラクじゃないんです。脇の芝生に手をついて、やっと支えているという感じでした。

それでも、梅雨明けしたばかりの心地よい海風に吹かれ、そんな姿勢をしばらくつづけていると、精神的には妙に穏やかな感覚に満たされ、さほど気にならないようになってきました。

「ねえ、明クン」

ボクは、視線を明クンの顔に戻し、真上から見おろ

しながら言いました。

「……ん？」

「あたしの、どんなところが？」

「……え？」

「あたしみたいな子ははじめてだって、さつき……」

「……ああ。ひとみってすごくかわいくて女の子っぽ

いけど……」

「けど……？」

ボクは、ちよつと心配になつて聞き返しました。

「うまく言えないけど、それだけじゃない気がする」

「……？」

「なんて言うか……本質的に頭がいいって言うか……。
つまり、僕のこと、すごくよくわかつてくれてるって
気がして……」

明クンがそんなふうにする理由は、だいたい想像が
つきます。

それは、たとえばこんなことです。

先刻、パソコンソフトの展示場で、明クンが事細かに、そして得意げに説明するのを聞きながら、ボクはちよつとオーバーなくらいに、いちいち感心してみせました。そうすることが、明クンにとって（つまり、男にとって：：というか、少年にとって）、なによりうれしいことだと思えたからです。

単純と言えば単純だけれど、ふつう、女の子は、モ

ノの（自分にとってなんの役にも立たない）機能に、
そこまで興味を示さないものです。そういうことに対
する男の子独特のフェティッシュな感覚というのは、
女の子にはよくわからないでしょうから。

明クンのように、頭がよくて、モテそうで、おまけ
にちよつと自意識の強い男の子は、女の子のそんなと
ころが不満なものです。

だとしたら、明クンが「ひとみはちがう」と感じる

のは、いわば当然のことでしょう。

ボクにとって、それは一度通ってきた道だし、さらに言えば、未だにボクは、そんなフェティシズムの固まりみたいなの人間なのですから（なにしろ、趣味はパソコンと女装ですからね）。

なんだかむずかしい話になってしまいましたけど、とにかくボクは、明クンを膝まくらしながら、そんなことを考えていました。

で、ふと気がつくとき……。

なんと明クンは、ボクの膝の上で気持ちよさそうに寝入っているのです。

「……え？」

ボクは、その寝顔を見て、なんだか拍子抜けしてしまいました。と同時に、明クンのことをかわいいとも思っていました。

木陰ではあっても、夏の木漏れ日は、明クンのニキ

ビもないさらっとした顔を明るくふちどっていていました。さわやかな海風は、そのやわらかい髪の毛を微かに揺すっていました。

ボクは知らず知らずのうちに、片方の手でその髪の毛を撫でていました。

と、そのせいかわ、それとも陽がまぶしかったからか、明クンは小さな声を漏らしながら、半分だけ寝返りを打ちました。顔をボクの体の方に向けて横になったの

です。

それは、ちよつと大変なことでした。

明クンはその鼻先を、ボクのスカートの前真ん中あたり……というか……脚と胴体の境目あたり……というか……（えーい、めんどくさい）つまりアソコに、押しつけるようなかたちになってしまったのです。

まあ、ボクのアソコのソレ（？）は、いつものように反対に折り曲げ、股にはさんでサポート力の強いシ

ヨーツで押さえていましたから、とりあえずは気づかれないでしょう。

でも、こともあろうにその部分に、薄いスカート生地を通して、明クンの寝息が吹き込んでくるのです。

おかげで、ボクの意志とシヨーツの力に抗して、それが勝手に自己主張し始めました。内腿で（つまり、明クンの顔のすぐ下で）、それが太くなり、むくむくと頭をもたげはじめたのです。

先の敏感な部分がショーツの生地と擦れて痛いし、それに、これ以上大きくなったらショーツを押し上げて股の間に立ち上がってきてしまうかもしれない。そうなれば、いくらなんでも、明クンだって気づくでしょう。

それにもうひとつ、心配なこともありました。……臭いです。

もう、ボクのものから液体が漏れ始めている

でしようから、すぐそばにある明クンの鼻にもその臭いがとどいているはずです。

△できれば、明クンが鈍感な嗅覚をしてくれ
ますように……▽

ボクは、そんなことを祈りながら、ただ、はらはらどきどきしていました。

△ボクが本当の女の子だったら、こんな心配しなくていいのに……▽

そんなことも（マジで）思いました。

でも、ボクはすぐに「そうでもないかもしれない」
V
と思っ直してました。

もし、ボクが正真正銘の女の子だったとしても、や
っぱり今と同じように感じているにちがいないと思え
てきたのです。

だって、バージンの女の子が、デートでいきなりこ
んなふうになれば、やっぱり変な気持ちになるだろう

し、臭いのこととか、あれこれ気にしちやったりする
でしょ。

△女の子なんだ……あたし。▽

そう感じると（……まったく、なんなんでしょ？）、
なんだかすごくうれしくなって、気持ちだけは妙に落
ちついてきました（体の方は相変わらずだったんです
けど）。

そしてそのあとボクは、明クンの頭を抱くようにし

て、その寝顔をじっと見ていました。

けつきよく、20分くらい、そうしていただでしょうか。

明クンはまた小さな声を立て、目をあけました。

一瞬きよとんとしたあと、明クンはボクの顔を見上げて、照れたように笑いました。

「僕、寝ちやつた？」

「……んふ」

ボクも微笑み返しました。

「ごめんね」

明クンの言葉に、ボクは首を振りました。そして――

「あたし、明クンのこと……」

大好き……：：：そう言いそうになって、ボクはあわてて言葉を呑み込み、言い直しました。

「明クンの寝顔、かわいかったよ」

明クンは、ちよつとすねたような表情をして、起き

あがりました。

ボクは、なんだか少し残念な気もしました。もつと、
ずっとそうしていてもよかったのに……。

そのあとボクたちは、水族館に入りました。日曜で
もあり、館内はけっこう混んでいたもので、ボクたちは
ごく自然に手をつないで歩いていました。

大きな水槽で気持ちよさそうに泳ぐ魚を、ガラスに

へばりつくようにして見ている時です。

隣の人に押されて、ボクの体は明クンの体に密着しました。自然、ボクは、明クンの腕にしがみつくようなかたちになります。

と、明クンのひじが、ボクのバストにあたったのです。バスト（と言っても、シリコンパッドですけど：
：）は、ちよつと押しつぶされ、そちら側のブラのストラップが肩に食い込みました。

ボクは、そのことにどぎまぎし、背の高い明クンの肩に顔を隠すようにして頬を赤らめました。

でも、それはボクだけではなかったようです。

その肩越しに明クンの横顔をうかがうと、揺らめく青い光の中、彼もやはり、妙に緊張した表情で、ジンベイザメを見ていたのです。

その日はけつきよく、「門限があるから」と（言う

までもなくウソですが、六時前に、明クンが乗り換える山手線の駅で別れました。

「今度の日曜も、会える？」

別れ際に言った明クンの言葉に、ボクはすかさずうなずいていました。

で、けつきよく、次の日曜もボクは明クンとデートし、そして、その週の途中から夏休みが始まって、会

う回数は、もつと頻繁になっていったというわけです。

明クンは、何度会っても、ボクの正体をつゆほども疑わず、16歳の女の子として接してきます。明クンからそんなふうに使われることに、ボクは内心はらはらしながらも（だからこそ）、わくわくするような興奮を味わい、女の子になりきろうとしています。

デートから帰って男に戻った時には、へこんだこと、いつまでもつづけてちゃいけないなVなんて思うので

すが、翌日になると、そんな「わくわく」がまた味わいたくてなって、パソコン通信で会う時間を決め、翌々日には、女装して出かけてしまうわけです。

とにかくボクは（職場から離れた開放感もあって）、「明クンとの夏」を思いっきり楽しんでいきます。それは単に「女装の楽しみ」というだけではなく、子供の頃のように、毎日が新鮮な驚きでいっぱい、「夏休みの楽しみ」なのです。

そんなデートについても、話したいことは山ほどあるのですが、またメールの字数制限に近づいてきましたから、ちよつととばして、今日のことを書きます。

：：いえ、その前に、ボクが自分の髪を伸ばした事情についても書いておかなければなりませんね。

明クンとのデートを繰り返しているうちに、ちよつ

と困ったことが起きました。

最初の頃こそ、せいぜい手をつなぐ程度だったのですが、そのうち、自然の成り行きとして（まあ、本当は不自然この上ないわけですが）、腕を組んだりするようになり、そして、最近では、明クンがボクの肩を抱いて歩いたりすることも多くなりました（明クンは180cm近くあるので、157cmのボクの肩を抱くにはちようどいいのです）。

そうになると、明クンがボクの髪をさわる機会が増えます（男の子って、そういうの、好きでしょ）。

ところがボクの髪はストレートロングのウィッグ。毛先ならまだいいのですが、頭の方に指を入れられたりしたら、それがばれてしまいます。頭を抱かれでもしたら、ずれないとも限りません。

で、ボクは、明クンにそうされそうになると、すつと身をかわしたりしていました。でも、それにも限度

があります。明クンだって、ちよつと不信がつているようです。

そこで、困ったボクは、自毛に切り替えることにしたというわけです。

さいわい（夏休みなのをいいことに）、最後に床屋に行つたのは六月中旬で、それ以後二ヶ月以上、髪を切っていませんでした。（もともと長めだった）バツクの毛先は肩にかかっていますし、うまくカットすれ

ば、女の子らしいミドルショートっぽくできるはずです。

で、三日ほど前、ボクは美容院に行つて、照れながら美容師に頼みました（雑誌の少女アイドルの写真を見せて、「こんなふうにして」と言ったのですが、こちらが恥ずかしがっているほどには、美容師さんは驚きませんでした）。

できあがりはほぼ想像していたとおりでした。部屋

に帰って女装してみると、（冒頭にも書いた内巻きのくせつ毛のおかげで）前のロングより、かえってかわいらしくなった気がしました。

で、今日です。

朝、池袋の駅で落ち合った時、明クンは、ボクの顔を見てちよつと驚いたようでした。

「切っちゃった」

ボクが言うと、明クンは「ふーん」と、ちよつと口をとがらせました。

たいていの男の子がそうであるように、明クンもたぶん長い髪の方がいいと思っっているのでしょう。

△失敗だったかな：：▽

電車に乗っている間、いつもより不機嫌そうにして
いる明クンを見ながら、ボクはちよつと悔やんでいま
した。

でも、「としまえん」(そこが、今日のデートの目的地でした)に着いてから、ボクは、やはり自毛にしてよかったと思いました。

コークスクリューだとかフライングパイレーツだとかに乗りながら、ボクはなんのためらいもなく、明クンに抱きつくことができました。

もともとそういう乗り物は得意な方ではないのですが、不思議なことに、ミニスカートなんかで乗ると、

以前、男の姿で乗った時よりずっと恐い気がして（もしかすると、恐怖感というのは、肌の露出度に比例するのかもしれない）、しかも、男の時のようにやせ我慢する必要もないので、ボクは思いっきり絶叫していました。

「きゃー」と叫び、目を閉じて、明クンの胸に顔を埋めると、明クンは（たぶん自分も恐いにちがいないのに）、ボクの頭をぎゅっと抱きしめてくれるのです。

こんなことは、ウィッグではぜったいにできません。
（それに、ウィッグで宙返りマシンに乗るといふのは、
べつの意味で恐いことになりそうです。）

恐い思いもいっぱいしたけれど、明クンに何度も抱
きしめられ、今日一日、ボクは幸せな気分にかけてい
ました。

そんなふうに一日をめいっぱい遊び、帰りはもう八

時を過ぎていました。

「送ってくよ」

山手線の中で、明クンが言いました。

「だめ。パパやママに見られたら大変だもん」

いつもそうしているように、ボクはそれを断りました。でも――

「今日は、どうしても送っていきたい気分なんだ」

「……」

明クンの言葉に、ボクはそれ以上反論しませんでした。ボクも今日は「送ってもらいたい気分」だったのです。

山手線から私鉄線に乗り換えて、ボクのマンションの最寄り駅に着いたあとも、ボクはなんとなく明クンと別れづらくて、けつきよく、マンション近くの露地まで肩を抱かれて歩きました。

「ここから先はダメ。門限ずいぶん過ぎちゃったし、

パパかママが家の前に出てるといけなから」

さすがに、独身者向けのワンルームマンションを見せるわけにもいかず、ボクはそこで立ち止まって、明クンに言いました。

と、明クンは、肩を抱いたまま、ボクの顔を見つめてきました。

「……ん？」

ボクが見返すと、明クンが言いました。

「その髪型、よく似合うよ」

「ありがとう」

明クンが、その指先をボクの髪の中につっこんで、頭を抱くようにしたので、ボクはまた、なんだか幸せな気分になっていました。

「これまでひとみは、ずっと、どっかで僕のこと、警戒してただろ。でも、今日は、いいってことなのかな？」

「え？ なにが？」

ボクが聞き返した瞬間です。

明クンが、その手に力を込めました。

そして、背の高い上体をかがめるようにして、ボクの唇に唇を重ねてきたのです。

「……ん！」

ボクには、なにかを言う暇もありませんでした。

明クンはもう一方の手をボクの背中にまわし、きつ

く抱きしめてきました。

ボクは（とにかくびっくりして）、両手を下げたま
ま、爪先立ちするような体勢で、そのキスを受けてい
ました。

ボクは最初、両目を大きくあけて明クンの顔を見て
いたのですが、すぐ近くで見つめてくる明クンの真剣
なまなざしに耐えきれず、目を閉じました。

明クンの胸に押しつぶされたシリコンパッドのバス

トの下で、心臓が早鐘のように打っていました。

今思うと、そんなに長い時間ではなかったのでしょうが、ボクには、その時間がずつとつづいているように感じられました。

やがて、その（けっして上手だとは言えない）キスが終わり、明クンの腕の力が緩みました。

ボクは、そっと目をあげ、明クンを見上げました。

「……ごめん」

明クンが言いました。

ボクは、呆然としたまま、ちよつと首を横に振りま
した。

そして、そのまま、家の方に向かって歩き出して
いました。

「怒った？」

ボクの後ろ姿に向かって、明クンがあせったように
声を掛けてきました。

ボクは立ち止まり、振り向いて、今度は大きく首を振りました。伸ばした髪の毛が、広がって揺れました。

そのあと、どうやって部屋に帰ってきたのか（ついさっきのことなのに）、あまりはつきりしません。ボクは、呆然としたままの状態で歩き、部屋に入って、そして気がつくとき、このパソコンの前に座っていたのです。

キスという行為だけを考えるなら、（こんなボクだ
って人並みに恋愛経験くらいありますから）けっして
初めてというわけではありません。でも、これまでは、
「される」のではなく「する」側だったので。

男からキスされたのは（もちろん）初めてです。そ
して、「ひとみ」という女の子にとっては、これは、
まぎれもないファーストキスだったので。

このメールを書いて、やっと少し落ちつきましたが、

今でもまだ、地に足がついていない感じがしています。

たしかに困惑はしていますが、それだけではありません。ずっと女の子の姿のままにいるのも、あの瞬間を自分の中で持続したいからなのでしよう。

今日のメールが、いつもとどこか調子がちがうのも、たぶんそのせいです。

気がつくと、また字数制限に達してしまいました（ほ

んとは、もつとずっと明クンとのことを書いていたいの
に)。

梨乃さん、今日のボクって、やっぱり、どうにかし
てますよね……。

5 通目のメール

梨乃様。お久しぶりです。IDナンバー、YTAO
0416の松沢です。

Resありがとうございます（と言っても、梨乃

さんから最後の電子メールを受け取ってから、三ヶ月近くたつてしまいました（；；）。

前にはさかんに、梨乃さんのResが遅いなんて言っておきながら、今度はボクの方が、ただいたメールにResしそびれていました。なんだか、ばつが悪かったというか……。

梨乃さんが書かれていたとおり、ボクのやってることは、やっぱり、ちよつとまずいことかもしれません。

「個人の楽しみとして女装するのなら、人を傷つけたりしないのがルールだと思います」という梨乃さんの言葉、胸に刺さりました。

たとえ結果的にであるにしろ、相手に女性だと信じ込ませて（つまり、だまして）つき合っているなんて、もしそれがばれた時には、相手をひどく傷つけることになるでしょうから。

ましてや、その相手が未成年ともなれば、なおさら

です。とても教育者のやることじゃないと思います。

じつは、ボク自身もそう感じているので、かえって、梨乃さんに返事が書きづらくなってしまっていたのです。

でも、一方で、梨乃さんに対して、ちよつと失望したのも事実なのです。

梨乃さんて、意外と常識人なんです。ああいう小説を書いてらっしやるから、もつと「翔んだ」方かと

思っていたのですが……。ボクは、梨乃さんがもう少しちがう答えを書いてきてくれるかなと思っていたのです。

たとえば、ふつうの男女関係を考えるとします。その場合、男も女も相手に対して自分をよく見せようと、いろんな手練手管を使うものでしょ。そういう意味では、まったく「ウソ」のない恋愛なんてないんだと思います。

で、たまたまボクの場合には、その「ウソ」に、トランスセックスを含んでいた——と、そういうふうには、考えられないでしょうか（なんか、強引な言い訳だとは思いますが）。

でも、要は、その「ウソ」でお互いが幸せな気分になれるかどうかでしょ。

なんせ十代の恋愛ですし（ボクは十代じゃないですが：）、べつに、結婚（！）とかセックスとかを考

えてるわけじゃないですしね（キスはしましたが：
：）。

少なくとも明クンは、ボクと会っている間、すごくうれしそうだし、ボクも、明クンから女の子として扱われることで、幸せな気分になれるのです。

それでいいじゃないですか。

ついた「ウソ」は、最後までつきとおして、うまく別れればいい——ボクは、梨乃さんからそんな答えを

期待していたのだと思います。

：：まあとにかく、ボクは梨乃さんの R e s を読んで、そんなことをあれこれ感じて、で、しばらくは誰かに相談したりせず、自分の気持ちにまかせてみようなんて思ったわけです（ボクは、ほんとに自分勝手なヤツです）。

：：と、そんなふうだったのですが、こうしてまたメールを書いているのは、（お察しのとおり）またち

よつと悩み事が起こってしまったからです。

で、他に相談する人もいず、けつきよく梨乃さんを頼ってしまったということです（勝手ですね、ほんとは）。

どうか、怒らずに読んでください。

とにかく、この前のメール以降のことを、まず報告しておきます。

夏休み終わり頃のデートで、ボクが明クンとキスしてしまったことは、書きましたよね。

で、そのあとボクは（懲りずに）明クンと会いつづけています。二学期が始まって、夏休み中のようによく頻繁にはいなくなりましたが、それでも、日曜や祝日はたいていデートです。

毎日交わしているパソコン通信のメールで会う時間と場所を決め、前日の土曜日の夜から準備し（脱毛と

か、いろいろありますから、日曜になると、かわいい服を着てでかけるわけです。

高校生どうしのデート（ということになっているわけ）ですから、まあ、街や公園を歩くとか、映画を見るとき、せいぜい遊園地に行くとか、いつもその程度のお金のかからないコースです。時には、図書館で、明クンの受験勉強につき合うなんてこともあります。

夏休み中と大きく変わったのは、帰りがちよつと遅

くなつたこと。会えばたいてい夜の八時くらいまでい
つしよにいて、そして……、最後は必ずキスで別れる
ことになります。

やっぱり一度許すと、男の子って強引なんですよね
(恥ずかしげもなく、よくこんな表現します)。

ボクのマンション近くの、いつもの露地まで送って
くると、明クンは立ち止まって人通りのないのを確か
めます。

そして、そのあと、ぎゅっとボクを抱きしめて、キスするのです。

ボクも（最初の頃こそ多少の抵抗はあったものの）、何度もされているうちに、それが当然のことになってきました。その場所に来ると、自分から目を閉じて、待っていたりします。

最近では、ただ唇を合わせるだけでなく、明クンの舌がボクの口の中に入ってきてたりします。ボクは背の

高い明クンにしがみつくようにして、それを受け入れます。その瞬間は、なんだか体がとろけてしまうような幸せな気分には：

：：いけませんね。こんなことばかり書いてると、梨乃さんに誤解されちゃいそうです（誤解じゃないよ
うな気もしますが）。：：つまり、なにが言いたいか
という、ボクはけっして、明クンにメロメロになっ
ているだけじゃないのだということですよ。

じつは、明クンとのデートを繰り返しているうちに、最初の頃のわくわくするような気持ち以外に、思わぬ楽しみを発見してしまったのです。

明クンはボクを女の子だと信じ切っているし、ボクの方もそれに慣れた最近では、明クンを冷静に観察する余裕が出てきました。すると、ボクには、明クンが考えていることが、手に取るようにわかるようになっていきました。

たとえばこんなふうには……

先々週の日曜日、いつものように午前中に落ち合つたボクたちは、吉祥寺まで行き、井の頭公園を散歩しました。

ぽかぽかと天気よかつたこともあつて、11月だといふのに、午後からはボートに乗ったりして過ごしました。

じつは、ボクにはそれがちよつと不満でした。その日は買ったばかりの真っ赤なコートを持って行ったからです。

ミニ丈で衿の大きな、すごくかわいいデザインで、ボクはそれに合わせて、真っ白なモヘアのセーターと、やはり白のミニスカートを着、ロングブーツをはいていたのです。それなのに、暖かいせいで、コートを着たところをなかなか明クンに見せられません。

でも、ボートを降り、そのあと、喫茶店で話している頃になると、ガラス張りの外の景色が、さすがに晩秋の夕暮れという感じになってきました。北風が吹き、落ち葉が舞い始めたのです。

△この店出たら、コート着よつと▽

アプリコットケーキをつつきながら、ボクがそんなことを思っていた時です。

「なんか、寒そうになってきたね」

やはり、外を見ていたらしい明クンが言いました。

「うん」

ボクが返事すると、明クンは、ちよつと考えるようにしてつづけました。

「これから、どこ行こうか？ 外歩くの、寒いしな」

「じゃ、渋谷まで戻る？」

「うーん」

明クンは、まだなにかを考えているようです。

「どうしたの？」

「うん。：：あのさあ、僕、今日、ちよつと金持つてんだ」

「ん？ どっか行きたいところあるの？」

「いや、つまりさあ、なんか、僕たちって、いつもこ
うじゃん」

「え、なに？」

「なんていうか、ただ会って、歩いて、話して、それ

だけでさ……」

このあたりで、ボクには、明クンの思っていることがピンとききます。でも、ここでボクは、思いきりとばけます。

ちよつと悲しそうな表情をつくり、明クンを見て聞きました。

「明クン、あたしといると、つまんない？」

「え？ う、ううん。そういうことじゃ、ないよ」

明クンはあわてたように言いました。

喫茶店を出ると、外はやはり、風が冷たくなっていました。

「これ、かわいいでしょ」

ボクはコートを着て、わざと無邪気そうに、まわって見せたりします。

「：：うん」

明クンは、歩きながら、ちよつと浮かない顔で答え

ました。

「なんだ。つまんないの」

ボクがすねたようにすると、明クンは、ボクの肩を抱きながら言いました。

「かわいいよ、すごく」

「んふ、うれしい。明クン、きつと、そう言うと思っ
た」

ボクは、明クンの肩に頭をあずけるようにしました。

こうなれば、もう、完全にボクのペースです。

しばらく、そんなふうに分えながら歩いていると、明くんはなぜか、メインストリートからそれて、裏道に入りました。

「こっちのが、駅への近道だからさ」

「ここ、風強いね。明くん、寒くない？」

薄目のジャケットを着た明くんは、ボクはそう言いました。じつは、明くんを心配しているわけではなく

て、その裏通りの中ほどに、ある建物を見つけたから
です。

と、案の定、明クンは、すぐさまこう答えました。

「うん、ちよつとね。どっか、あつたかいとこ入って、
休もうか？」

「え？　だって、さつき喫茶店入ったばかりよ。それ
に、駅はすぐそこだし」

ボクは、そのラブホテルの前を通りすぎながら、そ

う言っでやりました。

そのうえ――

「このコート、すごくあつたかいんだよ。明クンも暖めたげるね」

ボクは、肩に置かれた明クンの手をコートの衿で包み、抱くようにしました。そのせいで、明クンの手は、ボクの（シリコンパッドの）胸のあたりに押しつけられました。

明クンの体がこわばっているのが、ボクにはよくわかりました。

いけないことを考えている男の子には、このくらいの懲らしめは必要です。

……と、最近のデートは、だいたいこんな調子なのです。

キスマですませた女の子といっしょにいるというシ

チュエーションで、ハイティーンの子が考えていること——それは要するに、「やりたい」ということです（今度はまた、なんという直接的な表現でしょう）。

明クンがはつきり言えず、どんなにごまかそうとしても、ボクにはそれが手に取るように読みとれます（なんといいたって、ボクにとっては経験ずみのことなのですからね）。

で、ボクは、そんなこと全然わかってない無邪気な女の子のふりをして、明クンの気持ちをはぐらかしたり、じらしちやったりするわけです。

はっきり言って、こんな面白いことはありません。

なんか、これぞ「女の子の醍醐味」という気がします（ん？：：つうことは、ふつうの女の子たちも、そういうのわかってて、とぼけてるってことか）。

まあ、とにかくボクは、ただ明クンにのめり込んで

いるだけでなく、こんなふうには、余裕を持って遊んじやってる部分もあるわけです（それを含めてのめり込んでいると言えば、そうなんですけど……）。

で、今度は、この前の日曜の話です。

じつは先週の中頃、明クンからパソコン通信でこんなメールが届きました。

ひとみ ↑ 明

昨日のメール、僕のこと心配してくれて、ありがとう。
う。

たしかに昨日は最悪の状態だったけど、受験勉強放り出して一晩ゆっくり寝たら、風邪はどこかへ行っちゃったみたい。やっぱり、ひとみが言うように、この前、寒かったのが原因かな。

とにかく、今日はすっかり元気で、体育の時間のサ

ツカーでは、2ゴール決めたよ。すごいだろ。

ところで、今度の日曜の件だけど、じつはおふくろが、「一度、あんたの彼女、連れてらっしやいよ」なんてことを言い出してるんだ。

ひとみ、いやじゃなかったら来ない？

ひとみのパパは恐そうだから、僕はしばらく遠慮しとくけど、うちはもうあけっぴろげで、ぜんぜん平気だから、安心して来ていいよ。

おふくろは、なんか、おいしいもんごちそうしてくれるとか言ってる。

もしOKなら、明日までに返事ください。料理の材料の買い物とかあるから、早めに言っとかないと、おふくろに怒られちゃうからね。

Res、待ってます。

もう、当然来るものだという感じのメールでしょ。

こんなふうにならば、やっぱりことわりなくい
すよね。

で、ボクは（ちよつとヤバいなと思いつつも、明
クンの育った家庭に興味もあつたし）、とりあえず「う
かがいます」という返事を返しました。

さて、当日。

ボクはあれこれ迷つた末に、ピンクのニットのワン

ピースを選びました。白い衿とカフスのついた、オシヤレで上品なデザインです。その上からケープを着、髪にはリボンを飾ります。

途中でケーキなんかを買って、電車を乗り継いで駅に着くと、駅前には明クンが迎えに来ていました。

そこから10分ほど歩くと、新興住宅地の明クンの家に着きます。そんなに大きくはないけれど、庭などもよく手入れされ、センスのいい造りの家です。

「まあ、かわいいお嬢さんね。明にはもつたいないわ」
明クンのお母さんは、玄関に立ったボクを見るなり、
そう言いました。

たしかに明クンの言うとおりに「あけっぴろげ」な性格のようですが、あの明クンを産んだだけあって、お母さんの方こそ、相当な美人です。

「おじやまします」

ボクは緊張して言いました。

明クンに対しては、もう正体はばれないだろうという自信があったけれど、大人の、それも女性の目はきびしいにちがいありません。

午前中、リビングで明クンと話している時も、ボクは緊張しつづけていました。明クンの家はLDKがつながっている形式で、キッチンに立つお母さんにも、声が聞こえているからです。

それに、途中で出てきた明クンのお父さんが、あい

さつした後、リビングに面した庭でゴルフの練習をし始めたのです。それはたぶんにわざとらしいというか、スイングしながら、時折ボクの方をちらちら見たりするわけです。

お父さんも、若い女の子が来たことで、（照れながらも）そわそわしているという感じでした。

やがて昼食の時間になり、みんなでダイニングテーブルを囲みました。

「明はひとりっ子だし、こうして女の子が来てくれたりすると、私、うれしくって」

お母さんはうきうきと弾んだ声で、ボクに話しかけてきます。

「ご兄弟は？」

「お父様はなにされてらっしゃるの？」

「お母様はおいくつ？」

いろいろ聞かれましたが、ふだん明クンに話してい

る（架空の「ひとみの家」の）ことと矛盾しないように注意しながら、答えました。

明クンのお母さんの料理はすごくおいしかったのだけれど、ボクにはそれをゆっくり味わっている余裕などありません。話し方とか声とか、気をつけなければいけませんし、お行儀だってよくしなければなりません。

でもその緊張が、若い女の子の初々しさという感じ

になつて、ボクはそれを、けっこううまくやれたと思
います。

食後、ボクは、お母さんといっしよにキッチンに立
ち、かたづけものを手伝いました。将来、お姑さんに
なるかもしれない人には、やっぱり気に入られておき
たいでしょ（∴∴冗談です）。

でも、ワンピースの上にお母さんからお借りしたエ
プロンをつけ、お皿を洗っていたりすると、けっこう

「その氣」になつてしまつたのも事実です。

じつは、ボクはそこでコップをひとつ割つてしまつたのですが、そのことでしよげているボクを、お母さんは、へかawaiiVと思つてくれたようです。

そのあとボクは、明クンといつしよに二階の明クンの部屋に上がりました。

六畳くらいの洋間に、机と本棚とベッド、それに洋

服だんすがあるという、ごくふつうの男子高校生の部屋です。

「そこ、座って」

明クンに言われ、ボクがベッドに腰掛けると、明クンは、本棚の上のミニコンポにCDをセットし、スイッチを入れました。明るいポップスが部屋に流れます。ボクは、明クンのお父さんやお母さんと顔を突きあわている緊張から解放されて、やっとほっとしていま

した。

と、明クンは、ボクの隣に腰掛け、いきなりボクの肩を抱き寄せました。そして、キスしてきたのです。

「……あ」

ボクはびっくりしましたが（さっきまでひとりで緊張していたので「誰かにすがりたい」みたいな気持ちもあり）、それがけっこううれしくて、すぐに明クンの背中に腕をまわしていました。

ところが、そのキスは、ボクが考えていたのよりずっと長くつづき、明クンはなかなかボクを離してくれません。いつものような軽いのではなく、熱いものがこめられたキスなのです。

ボクは一方で△困ったな▽と思いながら、もう一方で、なんだか変な気持ちになってきました。

明クンが唇をこすりつけるように押しつけ、舌でボクの口の中をかき回すようにするのが苦しいのだけれ

ど、それをへせつないVと感じているのです。

その上、息ができず、鼻から出すと、どうしても「ん
くん」というような声になってしまいます。自分がそ
んな声を出しているということに、さらにおかしな気
持ちは増幅していきます。

へそうか、明クンがボクを自宅に呼んだのは、これが
「ねらい」だったのかV

ボクは、（冷静な部分で）そう思いました。考えて

みれば、閉ざされた空間にふたりつきりというシチュエーションは、これが初めてです。

やがて明クンは、ボクの背中をまさぐるようにしていた手を、前にまわし、おずおずと胸に触れてきました。

「……あ」

ボクは驚きましたが、さつきからの《せつなさ》のせい、それを拒否することができません。

明クンは、それに安心したらしく、ボクのバストを揉みはじめました。

おかしなことに（中身はシリコンパッドなのに）、ボクの体は、それに敏感に反応していました。

「あう：：ん」

△今、男の子に胸を揉まれているんだ▽

その思いが、ボクの全身を、いやいやをするように揺れさせているのです。

明クンは、その手の動きをだんだん激しくさせながら、唇をずらし、頬から首筋にかけて這わせはじめました。

ボクの《せつなさ》は、いよいよのってきました。そして、気がつくのと、なんと明クンは、背中にまわっていた方の手で、ボクのワンピースのファスナーを下ろしはじめているのです。

「だめ……」

ボクは、あわてて言いしました。

ワンピースを脱がされでもしたら、ブラの下のシリコンパッドに気づかれてしまいます。そうなれば一巻の終わりです。

「……だめだったら」

しかし、興奮している明クンには通じません。ファスナーを下ろすと、ワンピースをずり下げ、露出した肩のあたりにキスしはじめました。

ボクは本当に困ってしまいました。明クンを突き飛ばしでもすればいいのでしようが、そんなこと、できるわけありません（だいいち、ボク自身が感じているのは見え見えなのですから）。

△どうしよう：：：▽

ボクがそう思い、明クンがバストを揉む手を、ずり落ちたワンピースの衿から中に滑り込ませようとした時です。

ドアをノックする音が聞こえました。

明クンの動きが凍りついたように止まりました。

「……私」

明クンのお母さんの声です。

「あ……、なに？」

明クンはすつとボクから離れ、ボクはあわててワンピースをもとに戻して、ファスナーをあげました。

「おやつ持ってきたの。入るわよ」

ボクが乱れた髪をなおしていると、お母さんが入ってきました。

「ひとみさんがくださったケーキ」

ボクは、一方で△助かった▽と思い、そしてもう一方で△気づかれたんじやないか▽と思って、どきまぎしました。

「お父さんたら、おかしいのよ。ふたりつきりであること気にしちゃって、『お前、ちよつと見てこい』だ

って」

お母さんは、そう言って舌を出すと、ケーキと紅茶ののったトレーを置きながら、カーペットに座りました。

やはり、お母さんはなにか感づいていたのかもしれない。けつきよくそのあと、夕方、ボクが帰る時まで、その部屋に居つづけ、明クンとボクと、三人で話しつづけたのですから。

じつは、その会話の中で、ちよつと気にかかることがありました。

「ひとみさん、高二だって言ってたけど、どこの高校なの？」

お母さんにそう聞かれ、ボクが「S女子高校です」と答えると、お母さんは、つづけてこう言ったのです。

「あら、じゃあ、メグちゃんといっしょじゃない」

その時、お母さんが同意を求めるようにしたにも関

わらず、明クンはそれを無視し、唐突に、ボクにパソコンの話かなにかをしてきました。

それはけっして、いいところをじやまされて、お母さんに腹を立てているという感じではありませんでした。

さてここで、話は急にボクの職場に飛びます。(なにせ、また書きすぎて、字数制限いっぱいになってき

たので。)

二学期が始まって、ボクの職場での生活にも、ちよつとした変化がありました。

以前書いたと思いますが、ボクは、けっして生徒に人気がある方ではありませんでした。教科は「物理」だし、背は小さいし、その上、教育熱心な方ではないし……とにかく、まったく目立ったところのない教師でしたから。

ところが、二学期から、なぜか生徒のウケがよくなってきたのです。

前にはそんなことはなかったのに、授業後、ボクを取り囲んで冗談を言ったり、放課後、職員室に遊びに来たり、時には悩み事を相談されたり……。

どうしてそうなったのか、ボクにもよくわからないのですが、ひとつには、ボクの見かけが大きく変わったことがあると思います。

この前も書いたとおり、ボクは今、自毛を伸ばしたままにしています。そのままでは（例のくせっ毛のせいで）女性っぽくなるので、学校ではオールバックふうにしています。一般のサラリーマンではそうもいかないのでしょうか、教師は（むろん校風にもよりますが）、そのへん、比較的自由です。

とはいえ、さすがに男性教師でそこまで伸ばしているのはいず、ボクは、「意外と個性的な先生だ」と見

直されたのかもしれませんが。

それともうひとつ考えられるとすれば、精神的な変化です。ボクは明クンとつき合うことで、「女の子の気持ち」が、まちがいなく前よりわかるようになっていきます。それを、彼女たち独特の嗅覚でかぎわけ、「自分たちの味方だ」と感じているのかもしれませんが。

とにかくボクは、俄然「人気のある先生」のひとりになってしまいました。

で、今日のことです。

帰りのホームルームを終え、ボクが職員室に戻ろうとしてみると、ひとりの生徒があとを追ってきました。

クラス委員をやっている石原恵です。

「先生、ちよつと相談したいことがあるんですけど」
ふだん快活な彼女が、このところ元気がなさそうなので気にはなっていたのですが、今日の様子は、もう本当に思いつめているという感じでした。

「職員室へ来るか？」

ボクが聞くと、彼女は「あんまり、他の先生に聞か
れたくないから」と首を振りました。

それでボクは、彼女といっしょに中庭に出て、池の
そばにある庭石に腰掛けて話を聞くことにしました。

「私、ずっとつき合ってるカレがいるんです」

彼女は、池で泳ぐ鯉を目で追いながら、そう切り出
しました。

「母どうしが昔から友だちで、わりと近所だし、小さい頃から兄妹みたいにして遊んでたんです」

「幼なじみってわけ？」

「はい。ひとつ年上で、すごくかつこよくて、優しかったし……」

「……かったし？」

過去形になっているのが気になって、ボクは聞き返しました。

「ええ。高校入ってから、誘われて、ふたりでどっか行ったりして。何回か、キスしたことだってあるんです」

彼女は平然と言いました。ボクは自分が、そこまで「話せる先生」だと思われていることにちよつと驚きました。

「でも、この春くらいからだんだん冷たくなって、夏休み以降は会ってもくれないし、電話かけてもすぐ切

られるし……」

「ケンカでもしたのか？」

「いえ、彼女ができたらしいんです。なんでも、パソコン通信で知り合ったとかって」

「……え？」

「この前の日曜には、その子がカレの家まで来たらしいんです。カレのお母さんも『とってもかわいい子よ』なんて、気に入ってたって、電話で話したうちの母が

……」

ボクは激しく動揺しました。ボクと明クンとのこと
に、あまりにも話が符合しすぎています。

それに、彼女の名前は石原恵。恵……メグちゃん：
……。

「先生、こういう時って、どうしたらいいんでしょう？
男の子って、キスとか、そういうことって、あんま
り重要なことだと思っ
てないんでしょうか？」

ボクはそのあと、彼女に対してなんと答えたのか、あまり覚えていません。たぶん、「人を好きになることは、けっして悪いことじゃないけれど、高校生なんだし、あんまり思いつめたりせずには……」とかなんとか、一般的なことを言ったんだと思います。

職員室に帰って、あわてて石原恵の住所を調べると、たしかに彼女の家は、明クンの家のそばでした。

ボクは愕然としました。まさか、自分の教え子と、一人の男の子をめぐって三角関係になるなんて……。

それに、石原恵のことだけでなく、体を求め始めた明クンのことだってあります。

で、石原恵がボクにしてきたように、ボクも、梨乃さんに相談しようと思ったわけなのです。

「先生、こういう時って、どうしたらいいんでしょう？」

6 通目のメール

梨乃様。

IDナンバーYTAA00416の松沢です。また、
忘れた頃のResになってしまいました。

二ヶ月前、ボクが出したメールに、梨乃さんはすぐ Res してくださったというのに（そしてそれは、梨乃さんがボクのことを本気で心配してくださったからだというのに）、そのことで余計に、ボクは梨乃さんに Res しづらくなってしまったのです。

「あなたからのメールは、いつも自分のことをカッコ書きで茶化しながら、まるで他人事でも話すような調子ですね。でも、あなたがどれだけ茶化してみせても、

私には、あなたが、かなり抜き差しならない状況にいるように思えるのですが……。あなたの個人的な遊びに、何もわかっていない高校生を二人も巻き込んで、その上、最初は遊びだったはずのものが、あなたの中で、かなり本気になってしまっていますよね。私にあれこれ言う前に、ひとりの大人として、そして教師として、あなた自身が、そろそろ決着をつけなければいけないのではないですか」

たしかに、梨乃さんのおっしやるとおりだと思いません。
す。

どう考えても、いつまでもセブンティーンの子
（ボクの誕生日は11月なので、その日で、ひとみも17
歳になったことになっていきます）を演じつづけられる
わけはありません。ボクの正体が、24歳で、しかも男
だと知った時、明クンがどれほど驚き、そして傷つく
か、それを思うとぞつとします。

それに、ボクの生徒である石原恵は（明クンの気持ちが離れたことで）、もうじゅうぶん傷ついているわけです。

こんなバカな「遊び」に、未成年者を二人も巻き込んで、その上、ひどく傷つけて、「大人として、教師として」どう責任をとるのだと言われれば、ボクには答えようもありません。

最も賢明な（というか、唯一の）答えは、「こんな

ことからは今すぐ手を引く」ということでしよう。

でもボクには、梨乃さんにそう答えることができませんでした。やはり梨乃さんがおっしやっるとおり、ボクはかなり「本気」になっているようです。

：：というより、ボクの中に生まれた「ひとみ」という人格が、勝手に自己主張しはじめ、ボクにはコントロール不能になっている感じなのです。たとえば架空の人格でも、それがいったん他人から認められ、必要

とされると、独立した人格として確立されてしまうのではないかと：：（やめときます。これも、なんか、都合のいい言い訳に聞こえるでしょうから）。

とにかく、あれから二カ月、けつきよくボクは、ひとみとして明クンに会いつづけています。それどころか、仕事以外の時間はずっと（二人の時も）、女の子になって過ごしているのです。

仕事から帰ると、まずなにより先に女装してしまい

ます。そして、そのあと（それが梨乃さんへのメールを書く暇がなかったもうひとつの理由でもあるのです）が、一生懸命、あることをしているのです。

今日は、そのへんの事情から書きたいと思います。

「明クン、あたしの前につき合ってた子って、どんな子？」

石原恵から相談を受けた次の日曜日。明クンとのデ

ートの途中で、ボクは、さも何気ないふうに聞きました。

「え……？」

明クンは、コーラにむせ、持っていたチキンを落としそうになりました。

「……なんだよ、いきなり」

「なに、あわててるの？」

「……なにって、べつに……。だって、そうだろ。S

F映画の話、してたのに、いきなりそんなこと言うから……」

「どんな子だった？」

白いモヘアのセーターとタータンチェックのミニ、それに大きめのベレー帽という姿で、フライドチキン屋さんのテーブルに座ったボクは、明クンの目をのぞき込むようにしました。

「どんなって、そんなもん……」

「……いない？」

「……そりや、いたけど……」

「かわいい子？」（ボクは、石原恵の顔を思い浮かべていました。恵は、ボクのクラスの中では、まちがいはなく美人の部類です。）

「まあ……、それなりには……」

明クンは、ちよつとふてくされたような表情で答えました。

「髪は、長いのか？」（恵は、ストレートヘアがきれいな子なのです。）

「……ああ」

「性格は？」（しっかりとっていて、クラスメイトからの評判もいい子です。）

「まあ、悪い子じゃなかったけど……」

「じゃ、どうして別れたの？」（『新しい彼女ができたらしくて』と、恵は言っていました。）

「別れたって……、そんな深いつき合いじゃなかったし……」

「キスくらいはしたんでしょ？」（恵によれば）何回か”はあったようです。）

「……」

明クンは、そこで口ごもりました。

「したんだ、やっぱり」

ボクが、ふわっとふくらんだセーターの衿に顔を埋

めるようにして言うと、明クンはちよつとあわてたようでした。

「そんな……、してないよ。ひとみが初めて」

「ほんとに？」

「ああ」

明クンはおおむね正直でしたが、最後だけはウソをつきました。

でも、ボクはそれをうれしいと感じていました。そ

れはけつきよく、明クンが、ボクのことを大事に思っ
ていてくれるからだと思えたからです。

「じゃ、許してあげる」

ボクはそう言って、手に持っていたフライドポテト
の先にチュツとキスし、明クンの前に差し出しました。

「……このお」

明クンは、やっとほっとしたようにおどけた表情を
つくり、ぱくりとそのポテトに食いつきました。

それを見てボクが笑うと、明クンは、今度はちよつとまじめな顔になってこう言いました。

「この前、ごめんな」

明クンは、一週間前の日曜日、自分の部屋で、ボクの服を脱がしかけ、迫ったことを言っているのです（あの時、お母さんが部屋に入ってこなければ、ボクは、まちがいなくベッドの上に押し倒されていたでしょう）。

あれ以来はじめて顔を合わせたこの日、ボクらの間には、朝からどこかぎこちない雰囲気がありました。

明クンは、それを気にしているのですしょう。

「あたし、べつに怒ってないって、メールにも書いたでしょ」

じつは、すでにその一週間、パソコン通信のメールには、お互いの思っていることを書いていました。

明クンは「僕はひとみが好きだから、今すぐくひと

みを抱きたいと思ってる」と、はじめて正直に書いてきました。

それに対してボクは、「あたしも明クンのことが大好きよ。でも、バージンとか、そういうことって、やっぱり大事にしたいと思ってるの」というような返事をしていたので。

「あたし、高校生のうちは、そういうことしない方がいいと思ってるだけ」

ボクは、できるだけ深刻な口調にならないように、でも、その行為を許しているわけではないことが伝わるように、気をつけながら言いました。

「……うん」

ボクの言葉に、明クンはそう答えましたが、けっして納得しているふうではありませんでした。

けっきよく、フライドチキン屋さんでのそのことについての会話は、それで終わりました。

その話題にあんまり深入りしたくないと思っていたボクは、とりあえずほっとし、そのあとまた、今見てきた映画のSFXについて批評をはじめた明クンに、相づちを打っていました。

ところが、フライドチキン屋さんを出て夕暮れの渋谷の街を並んで歩いている時、明クンは、不意に言いました。

「……だけどさ、ひとみのクラスにだって、そういうことしてる子って、いるだろ」

「……え？」

「つまり、その……好きな子とエッチしてるっていう……」

「……あ、う……ん」

ボクは、まずいなと思いつつも、明クンの話の向
け方につられて、自分の受け持ちの生徒たちの顔を思

い浮かべていました。

「……よく、わかんないけど……たぶん、何人かは……」

「そんなに、いけないことなのかな？」

「……」

「好きなら、ごく自然なことなんじゃないのかな」

明クンは切実な口調でそう言い、ボクの肩の上に置いていた手を、脇の下にまわしてきました。ボクの体

を抱きかかえるようにしたのです。コートの上からでも、その指先が、胸の近くをまさぐったのがよくわかりました。

そのせいでしょう。

この前、明クンの部屋で抱きしめられたとき感じた《せつなさ》のようなものが、不意にこみ上げてきたのです。

△この前のように……キスしてほしい。抱きすくめら

れ、胸をもまれたいV

ボクはそんなことを思っていました。（恥ずかしいこと書いてますね。でも、もつと書いてしまえば）ブラジャーの中で、乳首が固くなるような感じさえありました（シリコンパッドですから、もちろん、そんなはずないんですが）。

そんなボクの動揺を見すかしたように、明クンが耳元でささやきました。

「ね、だめかな？」

思わず首をすくめたボクは、うなずきそうになる気持ちをやつとの思いで押さえ、小さく首を振りました。

「……だめ」

「どうして」

その言葉は、明クン自身がちよつと驚いたほど、強い語調になっていました。彼のせつなさが伝わってきました。

「だって……」

ボクは、それだけ言って（もちろん、本当の理由なんて、言えません）、うつむいて歩きつづけました。

けっきょく、その日のデートは、そんな雰囲気を残したまま終わりました。

それはボクにとっても、どうしようもないほどせつない冬の夕暮れでした。

ここで、話をボクの職場に移します。

女子高の12月の風物詩みたいなものなのですが、この季節になると、放課時間に（正確に言えば、時には授業中も、机の下に隠しながら）編み物をする生徒の姿が目立つようになります。言うまでもなく、カレへのクリスマスプレゼントを編んでいるわけです。

12月中旬に入ったその日も、朝のホームルームを終え、ボクが教壇を降りると、多くの生徒たちが、一斉

に棒針のついた毛糸編みを取り出しました。

一時間目が始まるまでの少しの時間も惜しんで精を出す彼女たちに、ちよつとあきれながら、ふと見ると、石原恵もまた編み物を手にしていたのです。

その時はそんなに意識していたつもりはなかったのですが、けつきよく、その日の午前中、ボクはずっとそれが気になっていたようです。昼休みに、職員室の窓から、校庭のベンチでひとり編み物をしている恵を

見つけた時には、自然にそこに足が向いていました。

「石原、なに編んでるんだ？」

近づき、声を掛けると、恵はびっくりしたように目を上げ、そのあと、はにかんだように笑いました。

「マフラーです」

「ふうん、新しいカレでもできたのか？」

ボクが隣に腰掛けながら聞くと、恵はちよつと意外そうな顔をしました。

「いえ、この前先生に話した子です」

「え？　　：：あ、そうなの：：？」

「三日前、久しぶりに向こうから電話があって、会ったんです」

「：：そ、そりや、よかったじゃない」

ボクは、内心の動揺を隠しながら聞きました。

「：：でも、その男の子に新しい彼女ができたんじゃないのか？」

「よくわかんないけど、どうもその子と、いまいちうまくいってないみたい」

ボクは、ドキっとしました。

「……!? どうして、そう思うの？」

「そういうのって、なんとなくわかるじゃないですか。

それに……」

「それに……？」

ボクが聞き返すと、恵はちよつと照れたように、ボ

クの方を見ました。

「こんなこと、先生に言っちゃっていいのかな？」

ボクは恵の次の言葉が聞きたくて、できるだけ気楽な笑顔をつくって見返しました。恵は、さらに照れながら、くすつと笑い、つづけました。

「なんか、カレたら、会うなりキスしてきたんです。なんていうか……要するに、飢えてるって感じで。ちよつとこわいくらいだった。男の子がそういうふう

なるのって、たぶん、むこうとうまくいってない証拠
でしょ」

「……」

ボクは、かなり動転していましたが、それをおし隠
して聞きました。

「……で、でも、石原。お前、それでいいのか？」

「私はカレにとって、その子のかわりでしかない、つ
てことですか？」

「……あ、ああ」

「そりゃあ、ちよつと悔しいけど……。でも、私、この前会って、明クンのことをわかってあげられるのは、けつきよく、私しかいないって思えたから。なんか、その子って、カレのこと、遊んでるだけだって気がするんです。明クンがあんなにイライラしてるのは、きっと、その子が明クンの気持ちをもてあそんでるからだって。だったら、カレ、いつかは、私のところに戻

つてくると思うから」

恵は、その時はじめて、はっきりと「明クン」という名を口にしました。そして、その口調は、なにか確信に満ちているという感じがしました。

「ねえ、先生」

内心愕然としながら、必死に表面をとりつくろって
いるボクに、恵は話を変えろという感じで聞いてきま
した。

「先生って、パソコン通信が趣味だって、前に言ってたでしょ」

「……え？ あ、ああ」

「この学校の生徒で、パソコン通信やってる子って、知ってますか？」

「……え。さ、さあ。いたとしても、きわめて個人的な趣味だからな。わからんな。で、でも、どうして？」

「カレのつき合ってる子って、どうも、ここの生徒み

たいな気がするんです。カレ、それとなく私の学校のこと聞いてくるし……。女の子でパソコン通信やってる子なんてあんまりいないだろうから、もしいれば、その子かなって」

明クンと最近一度会っただけなのに、恵はすでにかのりの部分まで感づいているようでした。以前から聡明な子だとは思っていたのですが、ボクは恵の勘の鋭さに舌を巻いていました。

「……しかし、まあ、青春するのもいいが、勉強のことも忘れるなよ」

ボクはそんな、どうしようもなく教師くさいことを言い、ベンチを立ちました。これ以上ここにいと、ボロを出しそうな気さえたのです。

「はい」

恵は、素直にうなずきました。

職員室に戻りながら、そつと振り向くと、恵はすで

に編み物に没頭していました。

ボクは恵に、激しい嫉妬を感じていました。

明クンが彼女にキスしたということもありましたが、なにより、彼女の言葉のはしほしに、ボクにはよくわからない「女の自信」のようなものを見せつけられた思いがしたからです。

「明クンのことをわかってあげられるのは、けっきよ

く、私しかない」から、「いつかは、私のところに戻ってくる」はずだという論理は、17歳にしてすでに、こわいほど「女」です。

その上、ボクについては、「明クンの気持ちをもてあそんでいる」だけだと言い切るのです。もしかすると彼女は、その「女の自信」で、無意識のうちに、こちらの正体を見抜いているのではないかという気さえしました。

そしてさらに言えば、その「自信」の「根拠」にな
っていることに、ボクは、嫉妬したのだと思います。

この前はキスだけだったようですが、もし明クンが
体を求めてきたら、恵はためらうことなくそれを差し
出すでしょう。そういう意味でも彼女は、「明クンの
気持ちをわかってあげる」ことができるのです。そし
てそれは、ボクにはぜったいできないことなりました。

その日から、ボクの中で、そんなどうすることもで

きないジュエラシーが渦巻き始めました。

そして、その結果、ボクがしたことと言えば、恵の聡明さにくらべたら、ほんとにばかみたいなことでした。

その日の夕方、部屋に帰って女装したボクは、なんと、手芸用品店に行っただけです。そこで、数冊の編み物の入門書と、毛糸と編み棒を買ってきて、その夜から、明クンにプレゼントするための編み物をはじめま

した（こんなふうに茶化すと、また梨乃さんに怒られそうだけど、まったく、バカでしよ）。

もちろん、ボクはこれまで編み物なんてやったことはありませから、編み棒の持ち方からはじめて、本と首っ引きで覚えるわけです。最初は、一生懸命やればなんとかなるだろうなんて思っていたのですが、とてもとても、そんな簡単なものではありませんでした。

それで、目標を、とりあえずは平編みだけでできる

マフラーに定め、毎晩、それこそ夕食すら忘れ、職場の忘年会も断って、編みつづけました（本当のところ、編んではほどき、編んではほどきを繰り返していたのですが）。

それにしても、ボクがそこまでのめり込めたのは、たぶん、毎晩、女装してから、それをやったからでしょう。

ホットカーペットの上に、長めのフレアスカートを

広げて横座りし、一心に編み棒を動かしていると、本当の女の子のような気持ちになれました。

伸ばしつづけている髪が時折目の前に降りてきて、それを上げようと顔を上げると、姿見にそんな自分の姿が映ります。そんな時、自分が、本当にかわいいやつだと思えました。

そして、そんな「かわいい自分」を、編み目のひと目ひと目に編み込んでいく……ボクはそんな陶醉感に

浸っていました（生徒たちが没頭する理由も、きっとそういうことなんだと思います）。

けっきよくボクは、そんなふうにならぬ女の子っぽくなることで、恵に対抗しようと思っていたのでしよう。

ところが、現実には、クリスマスが迫っても、そのマフラーはいっこうにできあがりませんでした。いえ、三分の二ほど編み上がったのはいたのですが、目は不揃いだし、編んでるうちにところどころ伸びてしまおうし

……。とても、恵の編んだもの（秘かに観察していたところ、恵は、20日過ぎには三色で編み分けたマフラーを仕上げていました）には太刀打ちできないしろものでした。

それなのに、非情にも、イブの日はやってきてしまいました。

ボクはしかたなく、マフラーの代わりに、ソニープ

ラザでアメリカ製のお菓子なんかを買って、明クンとの約束の場所に出かけたのです。

二時頃会って、プレゼントの交換をし、そのあと、イブの六本木の街を歩き、夕方、いっしょに食事（と言っても「高校生」ですから、そんなぜいたくな店ではありません）しました。

四ヶ月前なら、こんなふう二人で歩くだけで、わくわくした気分がいっぱいになれたでしょう。でも、

この日はそうはいきませんでした。

明クンはどこか不機嫌そう（12月に入ってからのデートはいつもそうでした）だし、ボクは、マフラーが編めなかったことで、落ち込んでいました。

イブで、街がうかれ返っているだけに、よけいに二人の間が沈んでいる感じがしました。

食事のあと、なにをすることもなく、広尾方向にぶらぶら歩いて、有栖川宮公園のベンチに並んで腰掛けま

した。

こんな時いつもそうするように、ボクは、頭を明クンの肩にもたせかけました。と、明クンが言いました。「もう、これまでみたいに、しよつちゆうは会えないよな」

「……え？」

ボクは、明クンの顔を見上げました。

「やっぱ、受験だしさ。ちよつとは受験生らしくしな

きや」

「……」

明クンの言っているのは、一応もつともな理由でした。いくら都立一流校のトップクラスにいたると言っても、そうはのんびりしていられないでしょう。それを理由にされては、反論もできず、黙ってうなだれるしかありません。でも内心ボクは、今こんなところで言い出さなくてもいいのに、と思いました。

一年のうちで最も日の落ちるのが早い季節です。六時そこそこだと言うのに公園の中は暗く、風も冷たくなっていました。人影もほとんどありません。

「……寒い」

ボクはそう言って、明クンの腕にしがみつくようにしました。

と、明クンは、無言のまま自分の大きなダツフルコートを脱ぎ、二人の体を包むように、前からかけまし

た。

その時です。

ボクは、明クンのコートの大きなポケットの中に、折り畳んでつつこんである”それ”を見てしまったのです。

マフラー。その毛糸の色には、明らかに見覚えがありました。

おそらく明クンは、ボクと会う前に、午前中、恵と

会っていたのでしよう。そして、それを渡された。

キスくらいはしたかもしれませんが。

そのマフラーを首に巻かず、ポケットの中に隠し持っている（今思うとそれは、明クンのボクに対する優しさだったかもしれませんが）ことが、よけいにボクのジェラシーを刺激しました。

△あたしにはあんなこと言っというて、恵とは会ってるんだ▽

ボクは、完全に逆上していました。

△明クンを、恵にとられたくない▽

ボクの気持ちは、明クンを恨むというよりも、そちらに向きました。

そしてボクは、自分でもわけがわからず、こう口走っていました。

「明クン、服の上からなら、さわってもいいよ」

「……え？」

驚いた表情の明クンの手を、かけられたコートの下でつかみ、ボクは自分の胸に押し当てていました。そして目をつむり、せがむように、唇を明クンの顔に寄せたのです。

ちよつとあつけにとられていた明クンも、すぐにそこに唇を押しつけ、胸をもみはじめました。

△恵には負けたくない▽

ボクの中の「ひとみ」が、嫉妬の炎を燃えたぎらせ

ていました。そして、その女としてのジェラシーに、ボクの体は感応していました。

「あ……ああ」

そして気がつくのと、ボクは、手を、明クンの前の部分にかけていたのです。

「……う」

明クンが、キスしたまま、小さな声をあげました。

それには、驚きの響きとともに、もちろん悦びの響き

も混じっていました。

明クンのジーンズの中では、それがすでにはちきれんばかりに張りつめていました。ボクはダツフルコートの下で、そこに掌をこすりつけるようにしました。

すると、それは、さらに硬く大きくなってきたのです。

へほら、明クンは、あたしにこんなに感じてくれているわ。ほんとは、あたしの方がずっと、明クンの気持ちをおわかってあげられるんだからV

たしかにボクには、どうすれば明クンがうれしいかだけはよくわかりました。ボクは掌と指先を使って、それを握るように、もむようにしました。

「……あ、あ」

明クンは唇を少しずらし、声をあげました。と同時に、胸をもんでいた手を移動させ、スカートの手地をたくし上げはじめたのです。

「……あ、だめ。お願い」

ボクは、あわてて、明クンのものを握っているのはちがう方の手で、その手を押さえました。

「……どうして？」

明クンは、あえぎながら聞きました。

そこでボクはまた、わけのわからないことを口走っていました。

「バレンタインまで……待って」

けつきよく、その一瞬後、明クンは、ジーンズの中で果てていました。

童貞（だと思えます、たぶん）の男の子にとって、じゅうぶんすぎる刺激だったのでしよう。そのおかげで、決定的なことはばれずにすみました。

それにしても、ボクはあの時、なぜあんなことを言ったのでしよう。

じつはあの時、ボクの頭の中にあっただのは、なによ

りマフラーのことだったのです。というより、ボクにとつては、マフラーがすべてでした。

明クンが恵のマフラーを持っていたのを見た瞬間、その数日間、マフラーを編むことばかり考えていたボクは、恵に明クンを取られた気がしたのです。

△何とかして、明クンの気持ちをつなぎとめたい▽

それで、（いわばマフラーの代わりに）あんな行動に出ていました。そして、一方で……。

ハクリスマスには間に合わなかったけれど、バレンタインデーまでかければ、きっと、恵のよりいいのが編める。そうすれば、こんなことしなくても、明クンの気持ちはあたしに向くんだV

冷静さを失ったボクの頭は、今思えば奇妙なそんな論理で動いていました。

ですから（まったくばかみたいなお話ですが）、ボクはあの時、「マフラーはバレンタインまで待って」と

言ったつもりだったのです。

それを、明クンは「バレンタインまでには決心するから、待って」という意味に取ったようです（よく考えれば、明クンは、ボクがマフラーを編んでいることなんて知らないわけですから、あのシチュエーションでは、当然です）。

あれからあと、年が明けて、明クンとは（二人で行った初詣も含め）、二度ほど会っています。受験のこ

ともあり、前より会う頻度は減ったのですが、あの「約束」が（ボクの思いとは裏腹に）功を奏し、ちぐはぐだった雰囲気はなくなりました。

明クンは、明らかにバレンタインデーが来るのを楽しみにしているのです。

恵とも会ってないようです。新学期になって、恵の表情がまた曇りがちなのを見れば、それはよくわかります。

で、ボクはといえは……、相変わらず、マフラーを編んでいるのです。

毎日、根をつめてやっているの、腕前は驚くほど上達しました。何度も編み直し、毛糸も買い直したりした結果、当初考えていたよりずっと手の込んだ、明クンに似合いそうなマフラーが、もうじきできあがります。

けつきよく、この二ヶ月あまり、ボクは、恵よりず

つと「女の子の論理」で行動していたのかもしれない。

正直な話、ボクはなんだか、自分自身がよくわからなくなってきたいます。そんな自分がこわくなっています。

明クンとの関係も含め、いろいろな意味で、もう限界がきているという気がします。

梨乃さんの言うように、なんらかの「決着」を見つけ

なければいけないのかもしれない。

バレンタインデーまで、あと数日。

ボクのマフラーが編みあがると同時に……。

- 「公開版」はここまでです。
- ◎ここまですを気に入っていただき、ラストまで読みたいという方は、下のボタンを押し有料の「完全版」をご購入ください。代金は**500円**です。
- ◎販売サイトとして [BOOTH] を利用しています。
- ◎ページが開いたら、**[PDF完全版(スマホ向け)]** をカートに入れ、支払いページに進んでください。
- ◎支払い完了時点で(オンライン決済の場合はすぐ)、ダウンロードが可能となります。

完全版を入手する

バージン・アクセス

Virgin Access

<公開版>

CopyRight 1995 by 前橋梨乃 (立石洋一)

あなたが個人で楽しむ目的以外での内容の無断コピー、および、ネット・印刷物への掲載、売買・譲渡を禁止します。

Share Text Fee ¥500